

平成 24 年度卒業論文

アイドル文化の宗教性—AKB48 の場合—

指導教官：八木久美子

東京外国語大学 外国語学部

東南アジア課程 マレーシア語専攻

学籍番号：7408017

家泉裕香

目次

| | |
|-----------------------|----|
| 目次 | 2 |
| はじめに | 3 |
| 第1章：アイドルグループ「AKB48」 | 4 |
| 第1節：アイドルとは | 4 |
| 第2節：AKB48とは | 4 |
| 第3節：AKB48と専用劇場 | 5 |
| 第4節：姉妹グループと公式ライバル | 5 |
| 第5節：AKB48独自のイベント、活動 | 6 |
| まとめ：AKB48の特徴 | 9 |
| 第2章：宗教の諸要素から見るAKB48 | 10 |
| 第1節：信仰—聖なる存在としてのAKB48 | 10 |
| 第2節：儀礼—ライブで行われる「ヲタ芸」 | 13 |
| 第3節：宗教集団—「ファン」という共同体 | 20 |
| 第4節：象徴—意味を持った「48」 | 25 |
| 第5節：聖地と巡礼—専用シアターの存在 | 33 |
| 第6節：救い—ファンが得られる心の平安 | 41 |
| まとめ：AKB48の宗教性 | 49 |
| 第3章：ファンとの関係から見るAKB48 | 50 |
| 第1節：AKB48の「近さ」 | 50 |
| 第2節：AKB48の「遠さ」 | 51 |
| まとめ：「近さ」と「遠さ」を持つ存在 | 54 |
| おわりに | 55 |
| 参考資料一覧 | 56 |

はじめに

テーマ設定理由

私は宗教学のゼミに所属していた。私にとって、宗教とは未知で不思議な存在であり、今まではどこか他人事のようにも感じていたと思う。しかし、専攻語の話されるマレーシアにおいては、イスラム教という宗教が国にとっても、個人にとっても、とても大きな位置を占めている。こうして、宗教、とりわけイスラム教について理解を深めたいと思うようになったのが、ゼミを選んだ理由であった。

ゼミでは、イスラム教について多くのことを学んだ。しかしこれとは別に、「宗教的」といえる現象や、一般的に宗教行事とは理解されないことがらに潜む「宗教性」について考える視点も学ぶことができた。この視点から様々なものを見て考察すると、日本には大よそ「宗教的」といえる現象が数多く存在していることが分かった。こうして私の興味の対象は、「ある」と認識できるイスラム教などの特定宗教についてよりも、「ある」とは認識されずに行われている「宗教的」なことがらへと、徐々に変わっていったのである。

そして私は、私の好きなアイドルグループ「AKB48」の中にも、宗教と実によく似た要素、システムが認められることに気が付き、これについて考察したいと思うようになった。私には、信仰する特定の宗教がないどころか、これまでAKB48ほど深くハマったものもなかった。AKB48こそが、自分にとって「宗教」の役割を果たしているのではないかと考えると、その宗教性にますます確信を持つことができた。よって、本論ではアイドルAKB48が持つ宗教性について考察していきたい。

AKB48 から見えるアイドルの宗教性

AKB48 は、日本のアイドル史において実に特徴的でインパクトのある存在である。グループのコンセプト、人気を得るまでの過程、楽曲やメンバーの総数、イベントなど、様々な角度から、AKB48 は従来のアイドルの型を破り続け、見る者を決して飽きさせない。

そして、こうしたAKB48 の特徴を紐解いていくと、そこには宗教的な要素が本当に数多く散らばっていることが分かる。本論で書ききるのとは不可能なほど、AKB48 には人を惹きつけ離さない強力なシステムが働いているのだ。それはまるで、宗教が人を束ねるのと同じであるように筆者には思えるのである。

アイドルAKB48 という、一見すれば宗教とは全く関係のないように思えるこの存在が、いかに宗教的な要素、性質を持ち合わせているのか。これから論じる中で明らかにしていく。

本論は3章からなる。第1章ではまず、研究対象であるAKB48 についてその概要を説明する。第2章では、宗教が持つ諸要素を切り口に、また第3章ではファンとの関係性の観点から、AKB48 の宗教性について考えていきたい。

第1章：アイドルグループ「AKB48」

近年、AKB48は「国民的アイドル」として絶大な人気を誇っている。CD不況と言われる時代の中で、リリースされたCDは次々とミリオンを突破し、その姿をメディアで見ない日はない。AKB48は、近年稀に見る社会現象を巻き起こしている。

では、AKB48とはどのようなアイドルなのか。この章では、本論の研究対象であるAKB48について、その概要を説明する。

第1節：アイドルとは

AKB48はどういった特徴を持つアイドルなのか。これを考察する前に、そもそも「アイドル」という言葉が何を指すのかを確認しておく。

「アイドル (idol)」とは、元来「偶像、崇拜される人や物」¹を指す言葉であるが、日本において、その言葉の意味は独自の発展を遂げている。インターネット（以下、ネット）上のフリー百科事典であるウィキペディアによると、日本における「アイドル」とは「人気のある芸人や多方面で活動する歌手、俳優、タレント、声優など意味する」²という。この定義では余りにも漠然としているかもしれないが、これは日本においてアイドルそのものが時代の中で変化し、多様化したからである。

しかし、現在多くの人が「アイドル」と聞いて連想するのは、大よそ「歌って踊る若者」の姿ではないかと筆者は考える。メディアにおいても、アイドルは俳優やタレントとは区別されていることが分かるであろう。よって、本論で用いる「アイドル」は「歌って踊る（若）者」、つまり「アイドル歌手」に限定することとする。

では以上を踏まえて、これからAKB48のアイドルとしての特徴を明らかにしていく。

第2節：AKB48とは

「AKB48（エーケービーフォーティーエイト）」とは、「会いに行けるアイドル」をコンセプトとして2005に結成された日本の女性アイドルグループである。作詞家、放送作家である秋元康がグループの生みの親であり、総合プロデューサーを務める。楽曲は全てオリ

¹ 新村出（編）『広辞苑 第六版』岩波書店、2008年

² ウィキペディア 「アイドル」

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%82%A4%E3%83%89%E3%83%AB>
(2013年2月17日参照)

ジナル曲を使用し、作詞は秋元康が担当している³。グループ全体での楽曲数は、シングル曲、劇場公演曲、派生ユニット曲などを合わせると、700 曲を超えている⁴。

次節以降は、AKB48 について、専用シアター、姉妹グループ、イベントに分けて、より詳しく見ていく。

第 3 節 : AKB48 と専用劇場

AKB48 最大の特徴は、専用劇場の存在である。AKB48 は東京、秋葉原に「AKB48 劇場 (エーケービーフォーティーエイトシアター)」という専用の劇場を持つ。グループ名である AKB48 の「AKB」とは劇場のある秋葉原 (AKIHABARA) の略である。

劇場では、ほぼ毎日公演が行われている。正規の「メンバー」⁵はチーム A、チーム K、チーム B の 3 チームに分けられ、この他に「研究生」も存在する。研究生とは、AKB48 の正規メンバーに昇格はしていないが、トレーニングを受け劇場公演への出演を許された者のことである。劇場公演は、主にチームごと (チーム A、K、B) で行われ、それぞれのチームがチーム専用の演目を披露する。研究生のみで行われる公演もあるが、これは正規チームの演目、衣装を借用して行われる。専用の演目は、数ヶ月から数年のスパンで更新されており、例えばチーム A は、グループ発足の 2005 年から現在に至るまでに 5 回演目が変更され、計 6 つの演目を持つ。

チーム A、K、B 間でのメンバーシャッフル (組閣) は過去に 2 回行われており、メンバーの卒業や研究生の昇格なども随時行われるため、メンバーの流動性は高いといえる。現在は、チーム A に 21 名、チーム K に 21 名、チーム B に 23 名、研究生に 19 名⁶おり、計 84 名のメンバーが所属している⁷。

第 4 節 : 姉妹グループと公式ライバル

AKB48 には、エスケイイーフォーティエイト SKE 4 8、エヌエムヒット NMB48、エイチケーティー HKT48、ジェーケーティー JKT48 といった「姉妹グループ」⁸と呼ばれる仲間グループが存在する。姉妹グループは、それぞれ名古屋の栄、大阪の難波、福岡

³ 北原里英の作詞した「guilty love」など、数曲の例外もある。

⁴ 2013 年 1 月 2 日時点の筆者の調べによる。

⁵ AKB48 に所属する者は「メンバー」と呼ばれる。

⁶ うち一名、江口愛実は CG により作成された架空の人物である。

⁷ AKB48 公式ホームページ メンバー紹介

<http://www.akb48.co.jp/about/members/> (2012 年 7 月 7 日参照)

⁸ (2012 年 12 月 1 日時点で) 専用劇場をまだ持たない SNH48、活動の始まっていない TPE48、解散した SDN48、及び OSJ48 はこれに含めない。

の博多、インドネシアのジャカルタに専用シアターを持ち、AKB48同様、各専用シアターで劇場公演を行っている。AKB48に姉妹グループを合わせると、そのメンバー総数は300名にも上る⁹。

姉妹グループのメンバーは、AKB48のメンバーと混ざって、「AKB48」としてCDのシングルや大規模なコンサート、メディアに出てくることがある。そのため「AKB48」と言うときには、AKB48の正規メンバーや研究生のみを指す「狭義のAKB48」である場合と、姉妹グループも含めた「広義のAKB48」である場合の2種類の解釈が生まれる。ほとんどの場合、この解釈の違いによって混乱が生じることはないため、本論でも「AKB48」とだけ書くことにする。あえて広義と狭義をしっかりと分けてほしいときのみ、これを表記する。なお、AKB48と全姉妹グループを合わせて呼ぶ際には、しばしば「4^{フォー}8^{エイト}グループ」という言葉が使われる。

姉妹グループとは別に、AKB48には「乃木坂^{フォーティシックス}46」という公式ライバルも存在する。秋元康が総合プロデューサーを務める点では、姉妹グループと同様である。しかし、乃木坂46は「ライバル」とある通り、AKB48との関係性が姉妹グループのそれとは異なっている。AKB48と姉妹グループとの間にある「仲間」としての様々な共通点、交流を、乃木坂46は持たないのである。

ではAKB48と姉妹グループとの関係性とはどういったものなのか。姉妹グループと公式ライバルである乃木坂46とは何が異なっているのか。この両者の差異については、第2章4節にて、詳しく述べることにする。

第5節：AKB48独自のイベント、活動

AKB48には、大変ユニークなイベント、活動が数多く存在している。1回だけ特別に行われた企画から、毎年恒例のイベントまで実に様々である。ここでは、恒例行事として行われているイベントに焦点を当て、その例として選抜総選挙、握手会、リクエストアワーセットリストベスト100、選抜じゃんけん大会の4つを挙げる。

選抜総選挙

1つ目のイベントは「選抜総選挙」である。このイベントは、CDのシングルに参加できるメンバーをファンの人気投票によって決めるという、AKB48の代名詞ともいえるイベントである。2009年の第1回目から毎年恒例のイベントとなり、2012年に第4回目が開催された。近年では、結果発表がテレビやネット上で生中継されるなど、各種メディアで大々的に取り扱われており、社会現象化している。

総選挙は、メンバーの人气が可視化されてしまうという大変シビアな側面を持つ。その

⁹ 2013年2月17日時点の筆者の調べによる。

反面、普段は選抜に入れないメンバーが、ファンの力によって選抜に入るチャンスを得るという点では、とても夢のあるイベントでもある。

投票の権利は、ファンクラブや各種サービスの他に、CD1枚に対しても付いてくる。そのため、同じ人物が複数のサービスから、またCDを何枚も買うことから、何票も投票できる仕組みになっている。自分の「推しメン」、すなわち自分の好きなメンバー、気に入っているメンバーを選抜入りさせるために、一人で何十票、何百票と投票するファンもいる。ファンにとっても、自分の推しメンへの愛情が試されるという意味で、とてもプレッシャーのかかるイベントなのだ。

ぎりぎりで選抜を逃すメンバー、ぎりぎりで選抜入りを果たすメンバー、大きく順位を上げるメンバーや、安泰だと思われていたメンバーの順位の下がりなど、毎年の結果発表では、一喜一憂の激動のドラマが展開される。特に「その年のセンター、顔」として認識される1位争いでは、毎年壮絶な闘いが繰り広げられている。ファンの中にもメンバーの中にも、これほど緊張感が走るイベントは、他にないだろう。

握手会

2つ目は、CD購入者を対象に行われる「握手会」である。ファンはCD1枚に付き、メンバーと2秒から10秒ほど握手することができる¹⁰。自分の好きなメンバーと1対1で顔を見合い、会話も楽しめるため、ファンにとっては大変貴重なイベントである。握手会もまた、劇場公演と同様に、「会いに行ける」というAKB48のコンセプトを実現させる役割を果たしている。

選抜総選挙と同じように、CDを買った分だけメンバーと握手することができるため、より多く握手をするために、同じCDを複数枚買うファンもいる。何度も握手会に出向くと、メンバーがそのファンの名前や顔を覚えてくれることがある。これは「認知」と呼ばれ、ファンにとっては最高の勲章であるといえる。認知を受けたファンとメンバーの間では、しばしば「久しぶりだね」「今日も仕事なの?」「髪型変えた?」など親しい仲であるかのような会話がなされることもあるようだ。

握手会を行うアイドルは多いが、ほとんどは売れる前の段階で、人気を獲得する手段として行われる。「国民的アイドル」と呼ばれるまでに成長したAKB48が、今なおCDをリリースする度に握手会を続けていることは、珍しい現象であるといえる。また、メンバーが100名近く参加することもあるという点で、その規模の大きさも異例である。

¹⁰ AKB48の握手会には大きく「全国握手会」と「個別握手会」の2種類がある。前者の参加券は市販のCDに付いており、メンバーと握手できる時間は2~3秒である。後者の参加券は劇場盤のCDに付いており、1枚で約10秒メンバーと握手することができる。両者の違いは、握手できる時間以外にもいくつかあるが、ここでは割愛する。

リクエストアワーセットリストベスト 100

3 つ目は「リクエストアワーセットリストベスト 100 (以下、リクエストアワー)」と呼ばれるイベントである。選抜総選挙がファンによるメンバーの人気投票であるとするれば、このイベントは楽曲の人気投票である。48 グループの全楽曲 (一部の曲を除く) 中から、ファンの投票によって上位 100 曲が決められるのだ。

リクエストアワーは、コンサート形式で 1 日 25 曲ずつ披露され、4 日間かけて行われる。順位は、1 日目に 100 位の曲から順に始まり、4 日目の最後に 1 位の曲が分かるようになっている。2008 年から続く恒例のイベントであり、毎年 1 月に開催される。

選抜総選挙と同様、投票権は各種サービスや CD に付けられている。順位が付いてしまうイベントではあるが、選抜総選挙とは打って変わって、ファンもメンバーも「お祭り」気分を楽しむイベントとなっている。

総選挙などの投票券、握手会などのイベント参加券のために、一人のファンが同じ CD を何枚も購入する。これは AKB48 の中では決して珍しいことではない。しかし、同じ商品をいくつも購入させるこうした販売方法が「AKB 商法」と揶揄され、非難的的となっているのも事実である。今までに行われた企画の中には、独占禁止法に抵触する恐れがあるとして中止されたものも確かに存在する¹¹。

だが現状を見ると、他の多くのアイドル、とりわけ AKB48 よりも後から生まれたアイドルは、AKB48 の成功に続くため、もはや当たり前のようにこの手法を取り入れていることも指摘できる。

選抜じゃんけん大会

4 つ目のイベントとして「選抜じゃんけん大会」が挙げられる。簡単に言えば、じゃんけんによって選抜メンバーが決められるイベントである。メンバーはトーナメント形式でじゃんけんを行い、勝ち抜いた上位 16 名が選抜メンバーとなる。1 位からセンター、前列、後列と、その順位によって曲中の立ち位置も決まる。

総選挙ではファンの投票によってメンバーが決められるが、元々メディアへの露出が多いメンバーの方が、どうしても上位になり易い。しかしじゃんけんであれば、知名度や実力に関係なく、運のみで決まるため、絶対的に平等な闘いであるといえる。

今まで一度も選抜に入ったことのないメンバーが選抜入りを果たしたり、選抜常連のメンバーが 1 回戦で敗退したりするため、革命とも下克上ともいえるイベントである。2010 年から 3 回行われており、AKB48 の恒例イベントの 1 つになった。

この他にも「AKB メンバーと行く花やしきツアー」「写真会」「部活動」「AKB 歌劇団∞ Infinity」など、AKB48 ならではの様々なイベント、活動がファンを楽しませている。

¹¹ 2008 年、8th シングルとして発売された「桜の花びらたち 2008」が劇場で販売される際、期間限定で CD に付録される 44 種類のポスターを全て揃えると、特別イベントに参加できるとしたシステムであった。

まとめ：AKB48 の特徴

以上を踏まえ、日本のアイドル史における AKB48 の特徴をまとめたい。

まず挙げられる特徴は、AKB48 が従来のアイドルに「会いに行ける」という全く新しい価値観を与えたことである。これまでのアイドルは、遠い世界の人であり、高嶺の花であった。アイドルを目にするのは、ほとんどテレビの画面上であり、ライブや握手会で生で見ることがあったとしても、それはとても限られた特別な場面でしかなかった。

AKB48 の「会いに行ける」ことを可能にしたのが、専用の劇場の存在であった。劇場では毎日のように公演が行われ、ここへ行けば簡単にアイドルに会うことができるようになったのだ。活動拠点として専用の劇場を持ったことは、AKB48 最大の特徴である。

AKB48 は、この劇場での地道なライブ活動から口コミで知名度を上げていった。それまでのアイドルの活躍の舞台が主にテレビであったのに対し、AKB48 は劇場でのライブがその出発点であり、ここでの公演が「基本」となっている。それは、AKB48 が大きなコンサート会場でライブを行うようになって、テレビや多くのメディアに登場するようになったとしても、貫かれている姿勢である。ライブ活動を中心に人気を得た点も、従来のアイドルとは異なる AKB48 の特徴である。

AKB48 には、「会いに行ける」というコンセプトを受け継いだ 4 つの姉妹グループが存在する。姉妹グループは、みな AKB48 と同様、各地の活動拠点に専用シアターを有している。あるコンセプトを基に、国境までも超え、全国的に活動拠点を増やしていくというスタイルも、従来のアイドルには見られなかった広がり方である。

また AKB48 には、大変ユニークで画期的なイベント、活動が数多く存在していることも指摘できる。メンバーや楽曲の人気投票を行うこと、大規模な握手会を開催すること、じゃんけんという運だけで CD の選抜メンバーを決めること、などの数々の企画は、これまでのアイドルには見られないものであった。こうしたイベントの数々も、AKB48 を特徴付ける要素の 1 つとなっている。

48 グループのメンバー総数、楽曲の多さも、今までのアイドルとは桁違いとなっている。AKB48 は 1 つのグループでありながら、実に豊かな多様性を有しているといえる。

以上が、AKB48 が従来のアイドルとは異なっていた点、つまり AKB48 のアイドルとしての特徴である。

第2章：宗教の諸要素から見る AKB48

この章からは、AKB48の持つ宗教性について論じていく。多くの宗教が持つと考えられる信仰、儀礼、宗教集団、象徴、聖地巡礼、救いという6つの要素を取り上げ、AKB48の中で起こっている現象を見ていながら、AKB48がこれらの宗教的要素を持つことを確認する。

第1節：信仰—聖なる存在としての AKB48

「信仰」とは、神や絶対者などの聖なる存在を信じ尊ぶことである。AKB48のファンにとって、AKB48はまさに聖なる存在であるといえる。

よってこの節では、ファンのAKB48に対する信仰心を明らかにしていきたい。まずは、信仰とは何か、宗教においてどのような役割を果たすのかを確認する。そして、ファンの具体的な行為を取り上げることによって、その心理状況を探り、ファンにとってAKB48がいかなる存在であるのかを考察していく。

「宗教」と「信仰」

社会学者であるデュルケムによれば、「宗教とは、神聖すなわち分離され禁止された事物と関連する信念と行事との連帯的な体系」¹²である。つまり宗教は、「信仰（信念）」と「儀礼（行事）」という2つの基本的範疇から成り立っており、前者は宗教の意識的側面、後者はその行為的側面を指している。

そしてデュルケムは、社会が「聖」と「俗」という2つの相反する概念によって二分できると指摘し、世界のあらゆる聖なるものと、他のあらゆる俗なるものを区別することが、信仰の特質であると述べた¹³。信仰という言葉は、一般的に神や仏などの絶対者、及びその教えを「信じ尊ぶこと、敬い仰ぐこと」¹⁴と理解される。これはつまり、絶対者やその教えを「聖なるものであるとみなし、他のあらゆるものから区別すること」と言い換えることができる。要するに、信仰とは宗教における心のはたらきであり、これによって神聖な存在が規定されるのである。

信仰の表れ

信仰とは何か、どのような働きを持つのかは上述した通りである。しかし、人が何かを

¹² デュルケム（著）、古野清人（訳）『宗教生活の原初形態（上・下）』岩波書店、1975年、pp.86

¹³ 前掲書、pp.72

¹⁴ 星野英紀、池上良正、氣多雅子、島菌進、鶴岡賀雄（編）『宗教学事典』丸善、2010年

「信仰している」と判断することは極めて難しいといえる。なぜなら信仰とはその人の意識でしかなく、本人の信仰告白なり、何かしらの行為なりを通じてしか、第三者はその信仰心を把握し得ないからである。

これは、AKB48 のファンにも当てはまる。つまり、AKB48 のファンにとって AKB48 は信仰の対象となっているのか。より分かり易く言えば、ファンは AKB48 を聖なる存在としてみなしているのかどうか。これは、結局のところファンの言動に基づいてしか、判断できないのである。

よってこの節でも、ファンのいくつかの言動を取り上げることで、AKB48 が信仰の対象となっていることを証明したい。しかし、ここで取り上げる事例が全ての AKB48 ファンに当てはまる行為ではないことに注意してほしい。

宗教においても、信者によって信心深さ、熱心さ、敬虔さに違いがあるのは当然である。ときには、冷静な判断能力を失い、社会のルールや常識を無視して常軌を逸した行動をする者が出てくる可能性も否定はできない。これは AKB48 においても同様であり、AKB48 を生活の中心に据える者から、ネットで無料の動画を楽しむ程度の者まで様々である。

ここでは、その熱心さ（ときに異常さ）に評価を与えるわけではない。以下の 2 つの事例は、AKB48 というアイドルグループが、ファンに聖なる存在としてみなされ、信仰の対象となっていることを分かり易く示すためのエピソードである。

事例 1 : CD の大量買い¹⁵

第 1 章で述べたように、AKB48 には握手会、選抜総選挙といった独自のイベントが存在する。握手会であれば、CD1 枚を購入するごとに 1 枚の握手券が付き、1 枚当たり最大で 10 秒ほど特定のメンバーと握手することができる。選抜総選挙であれば、CD1 枚につき 1 枚の投票券が付き、メンバーの誰か一人に対し 1 票を投じることができる。また CD1 枚につき、メンバー一人一人の生写真もランダムで付いてくる。

本来ならば CD がメインであり、握手券、投票券、生写真といったものはあくまでも「おまけ」のはずである。しかしいつしか価値が逆転し、これらの「おまけ」目当てで CD を購入する者が数多く出てきた。CD の購入には一人当たりの制限数などない。そのため、たくさん握手がしたければ、またたくさん投票したければ、一人で何枚もの CD を買うことになるのである。

総選挙の際、同じメンバーを推すファンがネット上に集まると、自分は何枚買ったか、何枚買い足すべきかなどが活発に話し合われる。そこには、まるで「推しメンのためなら当然だ（信者であれば当然だ）」とでもいうような使命感、義務感、正義感が見て取れる。匿名の情報も多いため、本当に一人で大量の CD を購入したかは真偽を問うことはできないが、その情報量の多さから見ても、複数枚購入する者は決して少なくないだろう。テレビでも、以前一人で同じ CD を 1000 枚買ったファンが取り上げられたことがあった。

¹⁵ 夏堀妃可「音楽業界における宗教との類似点」東京外国語大学卒業論文 2012 年

AKB48 を歌手とみなし、その曲を聞きたいだけであれば、もちろん CD は 1 枚で十分である。また、メンバーを「普通の女の子」とみなしているのであれば、わざわざお金を払って握手しに行く必要も、特定のメンバーを総選挙で上位にする必要もないはずである。

しかし、同じ CD を大量、もしくは複数枚購入するファンにとっては、大金を使ってでも、メンバーと握手をしたり、応援するだけの価値があるのである。つまり目的はどうか、同じ CD を何枚も買うという行為は、AKB48、もしくはその中の推しメンが、ファンにとっては一般人とは違う特別な存在であるという何よりの証拠なのだ。

AKB48 に興味のない人、好きではない人にとってみれば、数秒の握手のために同じ CD を何枚も買うことに、到底共感はできないであろう。選抜総選挙でも、何か見返りがあるわけでもないのに、推しメンに何票も入れるなんてバカみたいだと思う者もいるかもしれない。しかし、こうした意見が出てくることもまた、宗教の現場と同じである。つまり、その宗教を信仰する者にとっては価値のある行為であっても、その宗教を信仰しない者からすれば、それはときに無意味で、異様で、全く理解できないものに思われるのである。

事例 2：ファンによる事件¹⁶

AKB48 のことをどれだけ強く想うか、どれだけのお金をつぎ込むかは、ファンの自由である。しかし、一部のファンの熱狂ぶりが異常な「信仰」を生み出した例もある。AKB48 の周辺では、ファンによる犯罪行為¹⁷が後を絶たないのだ。

例えば 2010 年 3 月、AKB48 が撮影をしていた現場から小道具が盗まれた事件があった。犯行は当時 16 歳から 18 歳の少年 3 人によるもので、みな AKB48 の熱烈なファンであった。AKB48 への想いが強すぎる余り、彼女たちの使ったものがどうしても欲しくなり罪を犯してしまったのだ。

ファンによる事件の中では、握手券を利用した事件が特に目立っている。ネット上で握手券を名目に詐欺行為をした者、握手券を偽造し自ら使用した者、それらを販売した者が逮捕されたケースは少なくない。他にも、ファンが CD やグッズを購入するための資金集めに、窃盗事件を起こしたこともあった。

ファンであるにもかかわらず、特定のメンバーや姉妹グループに対して異様な攻撃性を出す者もいた。例えば、あるメンバーが恋愛禁止のルールを破っているのではないかと思ったファンが、ネット掲示板の「2ちゃんねる」に「コロシテやる」という殺害予告を書き込み書類送検された。また、同じく掲示板でのやりとりで、ファンが姉妹グループの専用シアターに爆破予告をして逮捕された事件もあった。

こうした行為は、間違いなく犯罪である。常識のある者であれば、それが社会のルール

¹⁶ 夏堀妃可「音楽業界における宗教との類似点」東京外国語大学卒業論文 2012 年

¹⁷ 「AKB48 ファンが起こした犯罪・事件全録記—痴漢から殺人まで」

<http://matome.naver.jp/odai/2134071990620126601?&page=1>

(2012 年 12 月 20 日参照)

によって禁止された行為であることは当然に分かるし、欲求に駆られたとしても、理性によってそれを制御することができるはずである。しかしこうした一部のファンは、盲目的に熱狂し過ぎる余り、正常な判断ができなくなってしまったのである。これらの行為自体を肯定することは到底できない。しかしこれらの事件は、AKB48 が人を心酔させ狂わせるほどの力、つまり異常な信仰心を生むほどの特別な力を持っている証であるといえる。

AKB48 への信仰心

以上、大きく2つのファンの行動から、ファンのAKB48に対する信仰心を検証してきた。程度の差はあれ、ファンにとってのAKB48は、一般人とは異なる特別な存在、他のあらゆるものから区別された神聖な存在であることが確認できた。AKB48を強く想い、彼女たちを求めるファンの心理は、宗教における信仰そのものである。

第2節：儀礼—ライブで行われる「ヲタ芸」

「儀礼」とは、宗教にとって最も重要な要素の1つである。全ての宗教は儀礼を持つと言っても過言ではないだろう。そしてAKB48も、実に多くの儀礼的行動を有していると筆者は考える。

この節では、まず儀礼を定義し、イスラム教の儀礼を例として挙げる。次にAKB48のライブでファンが行う「ヲタ芸」について説明をする。最後に、このヲタ芸を宗教の儀礼として捉えることができるのかを考察したい。

「儀礼」の定義

第2章1節でも触れたように、「儀礼」とは一般に信仰と対比される概念であり、宗教の持つ行為的側面を表す¹⁸。ここで論じられる儀礼とは、その対象が聖なるもの、超越的なものであるという点において、他の動物的儀礼や社会的儀礼とは区別される¹⁹。つまり儀礼とは、人が聖なるものに対してどのように振舞えば良いかを規定した行動の様式である²⁰。

¹⁸ 星野英紀、池上良正、氣多雅子、島菌進、鶴岡賀雄（編）『宗教学事典』丸善、2010年

¹⁹ 儀礼を「定式化された行動様式」として捉えた場合、それは動物的、社会的、超越的儀礼の3段階に分けられる。例えば「あいさつ」という行為は、形式的行動であるため、儀礼と呼ぶことができる。日常において人が交わす「あいさつ」のような行動は、動物界でも似たコミュニケーションが確認される。よってこれを動物的儀礼という。また人があいさつをする場合、相手が自分よりも目上ならば、それは「敬礼」になる。社会的立場に基づいて行われるこうした敬礼などは、社会的儀礼であるとされる。

²⁰ デュルケム（著）、古野清人（訳）『宗教生活の原初形態（上・下）』岩波書店、1975年、pp.77

人類学者であったムーアとマイヤーホフによると、儀礼には以下の 6 つの特徴が認められる²¹。なお、ここでは青木保の解説を参考にした²²。

- (1) 繰り返し行われる
- (2) 意識的に「行われる」
- (3) 「特別な」行動ないしスタイルを持つ
- (4) 秩序立っている
- (5) 喚起的なスタイルを持つ (演じられる)
- (6) 「集会的」次元に属する

これら 6 つの特徴について、より詳しく述べると以下のようになる。

- (1) 儀礼的行動は、同じ行為や動作の繰り返しである。それが行われる場面や形式なども同じもので繰り返されなければならない。行う度に違った形式が取られてしまえば、儀礼として意味を持つことはできないのである。
- (2) こうした儀礼的行動は、積極的に意識して行われる。そのため「自然発生的な」日常の行動からは区別される。
- (3) 儀礼的行動によって示される動作や言葉は、独自の仕方で行われ、独自のものが用いられる。それによって、他の日常的な行動とは明らかに異なるレベルが示される必要がある。
- (4) 儀礼的行動は、組織された意図的な行動であるため、それ自体に独自の「秩序」を持つ。行うべき行為は、始まりから終わりまで予め定められており、ときに目立つ「異様な」言動も含まれる。
- (5) 儀礼的行動は、日常の連続性の中に不連続を打ち込むイベントとなる。こうして儀礼的行動は特に注目される行動となり、人々の精神や感情に対して「異常な」働きかけがなされる。日常の一般的な行動とは異なり、刺激的な活動となる。
- (6) 儀礼的行動とは、集団で行われることが普通である。個人が一人で行う場合もあり得るが、それが社会的に有意義なものとなるのは、集団の次元である。

以上の議論を踏まえ、本論では、聖なるものを対象に行われ、かつ、これら 6 つの特徴を持ち合わせる行動形式を儀礼と定義する。なお、ほぼ同じ意味で使われる言葉に「儀式」

²¹ Sally Falk Moore, Barbara G. Myerhoff 「Secular Ritual」 pp.7
<http://books.google.co.jp/books?hl=ja&lr=&id=78gecnM8SKgC&oi=fnd&pg=PA3&dq=Myerhoff&ots=Jv9uUuLejV&sig=2bOlyyz3eABHQlYHvubSQdhf3JO>
(2012年12月8日参照)

²² 青木保之『儀礼の象徴性』岩波書店、1984、pp.21-23

があるが、両者の区別は明確ではない²³ため、本論では儀礼という言葉に統一する。

イスラム教における礼拝

宗教における例として、イスラム教の礼拝を挙げたい。礼拝はムスリム（イスラム教徒）に課された「五行」²⁴の1つである。では、この礼拝という行為が宗教的儀礼の諸特徴を満たすことを確認しよう。

- (1) 繰り返し行われる：ムスリムは1日の間に5回、決められた時間に、決められた方向に向かって、決まった行動様式に則って礼拝を行う。
- (2) 意識的に「行われる」：礼拝はムスリムの意思によってのみ実行される。
- (3) 「特別な」行動ないしスタイルを持つ：礼拝の動きやポーズなどは、イスラム教独自のものであり、日常生活のいかなる動きからも区別されている。
- (4) 秩序立っている：礼拝には、始まりから終わりまで、一連の動作が決められている。ムスリムでない限り、これらの動きに理解を示すことは難しいと考えられる。礼拝は、信仰を持たない者には特異な光景に映ることになるであろう。
- (5) 喚起的なスタイルを持つ（演じられる）：礼拝をしている間は、神と自分の存在だけが明確にされ、神を近くに、確かに感じるができる。これは日常生活では味わうことのできない特別な状況である。神との一体感、幸福で満ち足りた感覚を覚える。
- (6) 「集会的」次元に属する：礼拝は個人的に行うことも可能であるが、共同体（ウンマ）との一体感を感じるためには、複数のムスリムが同時に行う必要がある。複数人が集まって礼拝を行うことによって、より神の存在を実感させられる。

この礼拝という行為は、何よりも神のために行われているという点で、イスラム教の礼拝も、儀礼の1つとして認めることができる。

ライブにおける「ヲタ芸」

AKB48の文脈においても、実に多くの儀礼が存在していることが指摘できる。中でもAKB48単独で行われるライブでは、こうした儀礼的行動が最も顕著に現れる。ライブとは、歌手やアーティストなどを目の前にして、そのパフォーマンスを生で見ることのできる、ファンにとっては大変貴重な時間、体験である。AKB48においては、専用シアターで行われるライブを「公演」または「シアター公演」と呼び、大きなホールなどで行われるライブを「コンサート」と呼ぶ。したがって本論で用いる「ライブ」とは、シアター公演とコンサートの両方を指すものとする。

²³ 廣松渉、子安宣邦、三島憲一、宮本久雄、佐々木力、野家啓一、末木文美士（編）『岩波哲学・思想事典』岩波書店、1998年

²⁴ 信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼がイスラム教における五行である。

本節では、AKB48 のライブ中に見られる儀礼として「ヲタ芸」²⁵を挙げたい²⁶。ヲタ芸とは、簡単に言えば「ヲタクの芸」の略であり、ファンによって曲中に行われる独特の動きや掛け声を指す。ヲタ芸には複数の種類があるのだが、ここではAKB48のライブ内で見られるヲタ芸のうち3つを取り挙げ、簡単な説明を行う。その上で、これらのヲタ芸が儀礼の定義に当てはまるのかを検討していきたい。

なお、AKB48 のライブで見られるヲタ芸は、AKB48 の完全なオリジナルであるというよりは、従来アイドルや音楽シーンで見られるものの踏襲であったり、それを少し変化させたものであることが多い。しかし、AKB48 のライブにおいてはある一定のスタイルが確立されており、それに従うことがファンには期待されているため、これらをAKB48「独自の」ヲタ芸として捉えることにしたい。

また、後に挙げる「MIX」についてはヲタ芸に含まないという説もあるが、ここではそれも含めてヲタ芸とする。したがって、本節での「ヲタ芸」は「AKB48のライブで見られるファンによる特殊な言動」として捉えて欲しい。

AKB48 のライブの中で最も目立つヲタ芸が「MIX」であるといえる。MIX とは比較的テンポの速い曲のイントロ、間奏、アウトロで行われる呪文のようなものであり、これを唱えることを「打つ」という。MIX には主に「スタンダード」、「ジャパニーズ」、「アイヌ語ゼンキョウオリジナルヴァージョン」の3種類があるが、文言は以下の通りである。

- スタンダード

あ〜 よっしゃいくぞー タイガー ファイヤー サイバー ファイバー ダイバー バイバー ジャーチャー

- ジャパニーズ

あ〜 もういっちょいくぞー とら 虎 ひ 火 じんぞう 人造 せんい 繊維 あま 海女 しんどう 振動 かせんとびじょきよ 化繊飛除去

- アイヌ語ゼンキョウオリジナルヴァージョン

チャペ アペ カラ キナ ララ トウスケ ミョーホントウスケ

主に、スタンダードは曲の前奏中に行われ、ジャパニーズは2番に入る前の間奏で行われる。MIX を打てる時間が長い曲の場合、オリジナル、ジャパニーズに続けて足されるのがアイヌ語ゼンキョウオリジナルヴァージョンである²⁷。

スタンダードからジャパニーズを見れば、大よそ同じ意味の単語が並んでいることが分かる。アイヌ語ゼンキョウオリジナルヴァージョンも、基本的にはこれらの単語をアイヌ

²⁵ 「オタ芸」とも表記するが、ここでは「ヲタ芸」に統一する。

²⁶ ブログ「刻苦勉励〜明日もまた元気で過ごそう〜」内「AKB48 について色々調べてみたヲタ芸編」

http://kazu-o-uzak.at.webry.info/201005/article_71.html (2012年12月20日参照)

²⁷ 3種類（もしくはスタンダードとジャパニーズの2種類）を連続させる場合は、省略される文言もある。曲によっても異なってくるため、ここでは割愛する。

語に訳したものである。

では、虎、火などの単語の組み合わせや順番はどのように決められたのか。実は MIX には本来以下のような意味があり、MIX で用いられる単語はこの意味に由来している。

「虎の如く火の如く、人の造らざる繊細な心も維新となれば海をのみ、女を食らふ。その振動を心の有るがままに化身し、本来繊細な心を飛ばし刹那に思ふがまま除き去る。これ、己に忠実。刹那な刻の流れに身を任すのみ、これこそ高まりの心髄なり」²⁸

以上から、MIX は本来心が「高まる」とき、すなわち感情が高ぶり、興奮状態になった際に唱えられるものであると分かる。しかしながら、現在の AKB48 のライブを見る限り、この本来の意味はほとんど重視されていない。意味も分からず MIX を打っている人も決して少なくはないだろう。例えば、AKB48 の姉妹グループであり、インドネシアのジャカルタに専用シアターを持つ JKT48 のファンも、この MIX をそのまま真似て打っている。彼らの中で、MIX の本来の意味までも理解している者はそれほど多くないだろう。

それでも、MIX に潜在的な意味があることは事実であるし、決まった場面で決まった文言が唱えられることも確かであるため、それはまさに呪文、もしくは祈りのようなものであるといえる。社会学者で、自身も AKB48 のファンであることを公言している濱野智史の言葉を借りれば、それは「念仏」である²⁹。MIX は、個人が盛り上がること、ファンサイドからライブ全体を盛り上げることを可能にするだけでなく、同じ言葉を発することによって、ファン同士の一体感も高めることができる。³⁰

次に挙げるヲタ芸は「ケチャ」である。ケチャはインドネシアのバリ島において、神聖な存在に向かって行われる呪術的な舞踊が基になっている。ライブにおける神聖な存在とは AKB48 のことである。ファンがステージ上にいる AKB48 に向かって腕を突き出す（もしくは突き上げる）動作が一般的なケチャとされ、主に曲の伴奏が小さくなる際に行われる。ケチャはその動作から、聖なる対象へ体全部を使って念を送っているように見える。もしくは、全身で祈りを捧げているようにも捉えられる。

最後に挙げるのは「フリコピ」³¹である。これは文字通り、AKB48 の踊り（フリ）を真似る行為である。どこで行うかは特に定められていないが、フリが簡単で真似し易い場合

²⁸ ブログ「刻苦勉励～明日もまた元気で過ごそう～」内「AKB48 について色々調べてみたヲタ芸編」

http://kazu-o-uzak.at.webry.info/201005/article_71.html (2012 年 12 月 20 日参照)

²⁹ 小林よしのり、中森明夫、宇野常寛、濱野智史『AKB48 白熱論争』幻冬舎新書、2012 年、pp.108

³⁰ ファンによっては MIX が嫌いな者もいる。また MIX は、曲によっても少しずつ言葉尻や打ち方が変化するため、完全に統一したものを紹介することは困難である。本節での説明はあくまでも基本的、かつ近年の AKB48 のライブで主流のものを載せることに努めた。

³¹ 「フリマネ」とも呼ばれるが、ここでは「フリコピ」に統一する。

やサビで行われることが多い。ライブ会場はスペースに限りがあるため、手のフリのみを真似ることがほとんどである。このフリコピという行為は、祈りというよりむしろ、聖なる存在、つまり AKB48 の動きをそのまま行うことによって、彼女たちとの一体化を図っているように見える。

ライブ中には、他にも「手拍手」³²、「ワーイング」³³、「コール」³⁴といった様々なヲタ芸が存在しているが、紙面の都合上ここでは割愛する。ただ 1 つ言えるのは、これらのヲタ芸も MIX と同様、どこでどのように行うべきかが大よそ定められており、これらを行うことによって得られる効果も、MIX とほぼ同じであると考えられるということだ。

ではこうしたヲタ芸が、先ほど紹介した儀礼の 6 つの特徴に当てはまるのかを見ていきたい。

(1) 繰り返し行われる

ヲタ芸は、AKB48 のライブ中、同じ曲や同じ場面において、同じ形式を持って繰り返し行われる。

(2) 意識的に「行われる」

ヲタ芸は、日常生活における行動とは完全に区別されている。またファンがそのヲタ芸を知らなければ、ライブに来ていたとしても、それを行うことはできない。つまり、ヲタ芸は「自然発生的な」行動ではなく、積極的に意識して行われるものである。

(3) 「特別な」行動ないしスタイルを持つ

AKB48 のライブ中に行われるヲタ芸は、AKB48 のファン独自のタイミング、独自の方法で行われる。そこには日常的行動には見られない、異なるレベルが示されている。

(4) 秩序立っている

ヲタ芸には始まりから終わりまで、何をどのように行うかが定められている。1 つ 1 つのヲタ芸に手順があるのとは別に、1 曲の間にも、どこでどのヲタ芸をするべきかが定められている。そしてこうしたヲタ芸は、部外者やそれを知らない者にとっては、理解しがたい「異様」な言動に見えるだろう。

(5) 喚起的なスタイルを持つ（演じられる）

ヲタ芸は、ファンの精神や感情に対して「異常な」働きかけを起こす。ファンは、日常生活では味わうことのない感情の高ぶりを感じたり、聖なる存在との一体感を感じるこ

³² 曲中に決められたタイミング、リズムで手拍子をする事。

³³ 曲中に決められたタイミングで「お～はい、お～はい」などと掛け声を上げること。

³⁴ 曲中の決められたタイミングで推しメンの名前を呼ぶこと。

によって熱狂する。

(6) 「集会的」次元に属する

ヲタ芸の多くは、ファンの集団全体で行われる。個人単位で行うものも存在するが、集団の一体感を生むのは、それが集団で行われた場合である。個人の感情に及ぼす影響も、個人で行うより、集団で行われた方がより強烈になると考えられる。

以上から、AKB48のライブ中にファンによって行われるヲタ芸は、儀礼と位置づけることができる。ヲタ芸の対象はAKB48、つまりファンにとっての聖なる存在であるため、この儀礼が動物的でも、社会的でもなく、宗教的儀礼であることも確認できる。

その他の儀礼

儀礼の補足として、ファンの服装と「overture」について触れておく。

ライブの際、ファンは「どんな格好をするべきか」も規定されていると言って良い。多くのファンは、専らカジュアルで動きやすい服装を選択する。クラシック音楽のコンサートであれば、人はフォーマルな格好、正装で行くことを期待されるが、AKB48のライブの場合、正装はむしろ浮いてしまうだろう³⁵。またAKB48には様々な公式グッズがあり、サイリウム³⁶やうちわを持ったり、推しメンの名が書かれたタオルやハチマキ、そのコンサート限定のTシャツなどを身に付けたりするファンも多い。カジュアルな服装であっても、ファンはこうしたアイテムを身に付けることによって、日常の服装との区別を図っているといえる。

AKB48には「overture」という曲があり、語義通りライブの際の序曲として用いられている³⁷。この曲の始まりは、すなわちライブの始まりを意味する。そのため、今か今かと待っていたファンのボルテージは、この曲によって一気に上がることになるのだ。overtureが流れている最中にも、この曲独自のMIXがファンによって打たれる。ファンは、この曲とMIXによって、ワクワクとも、ドキドキとも、ハラハラとも言いがたい興奮状態に陥り、日常生活とは全く異なった「AKB48の世界」へと入っていくのである。そしてそれまでは「知らない人、赤の他人」であった隣の席の人間も、同じファンとして仲間意識を持つようになり、一体感が生まれる。overtureもライブにおける儀礼であるが、一瞬でファンの心を日常から分離させるという点においては、他のヲタ芸よりも強力な儀礼であるといえる。

³⁵ 夏堀妃可「音楽業界における宗教との類似点」東京外国語大学卒業論文 2012年

³⁶ 別名、ペンライト、ケミカルライト。ポキッと折って筒の中で化学反応を起こすことによって、色とりどりに発光する道具。

³⁷ 近年、劇場公演の前座として設けられた「前座ガールズ」は考慮しない。

AKB48 内のタブー

デュルケムは、儀礼が「すべきこと」の他に、「してはいけないこと」も規定すると指摘した。これまでに見てきた諸儀礼は、全て前者に当てはまり、これを「積極的儀礼」と呼ぶ。一方後者は「消極的儀礼」といい、一般的に「タブー」という言葉で理解される。

この説では最後に、AKB48 の中に存在するタブーを挙げる。それはファンに課されている「押し変」というタブーである。押し変とは、押しメンを他のメンバーに変える行為を指す。この押し変についても、ファンによっては見解の違いがあることはもちろんであるが、全体として、歓迎される行為としてはみなされていない。押し変は裏切り行為であり、許されることではないと強く主張する者もいれば、押し変をしたが、どこか罪悪感が残るといふ者もいるようである。押しメンを増やしていく「押し増し」や、押しメンの卒業に伴う押し変、1回2回の押し変は許容される傾向にあるが、頻繁に押し変をする者は、非難的となり得る。もっとも、誰を押しメンにしているのか、いつ誰に押し変したのかは、そのファン自身が告白をしなければ分からないことである。自らが公言をしない限り、誰に攻められるわけでもなければ、押しメンだったメンバーが知ることもしない。しかしそれでもなお、ファンの多くは押し変を「してはいけない行為」もしくは「なるべくしない方が良い行為」として捉えている。よってAKB48における押し変は、罪の意識の差こそあれ、タブーであるといえる。

以上から、AKB48にはデュルケムが指摘したように、積極的儀礼の他に、タブーと呼ばれる消極的儀礼も存在していることが確認できる。

第3節：宗教集団—「ファン」という共同体

「宗教集団」とは、宗教を構成する要素の中でも、信仰や儀礼と特に密接な関係を持つ要素である。同じ信仰を有する信者が2人以上いれば、それは宗教集団とみなすことができる。宗教集団は専ら儀礼を通じてその結束を強め、可視化される。

そうであるならば、AKB48のファンも、AKB48に対する信仰を共有した宗教集団とみなすことができるのではないか。そして前節で述べたAKB48における儀礼を通じて、ファンもまたその結束を強め、共同体として一体感を持つことになるのではないか。

この節では、まず宗教集団と信仰、儀礼の関係性について述べる。次に、その例としてイスラム教の宗教集団を挙げ、その後、AKB48のファン集団にも同様の現象が起きていることを確認したい。

また、宗教集団はときにその集団内にヒエラルキーを生じさせる。AKB48のファン集団の中にも、宗教のそれと同じように、ある基準に則って階級分けが行われる。最後にこのヒエラルキーについても述べておく。

宗教における「宗教集団」³⁸

第2章1節では、デュルケムの議論を用いて宗教を定義した。この定義によれば、宗教は信仰と儀礼という2つの側面から説明することができる。しかし宗教学事典を開くと、宗教の定義は数多くあることが指摘されている。その大きな理由は、宗教と呼ばれる現象それ自体の多様性にある。では信仰、儀礼に加え、大半の研究者が一致して挙げる宗教の主要な側面には何があるのか。その1つが「宗教集団」³⁹である。

宗教集団とは、宗教活動を行う複数の信者によって構成される集団のことである。宗教集団は、本質的には「記憶の共同体」である。つまり、共通する重要な集会的記憶を保有し、その記憶の持続を通じて存在する集団のことである。

そして信仰、儀礼、宗教集団という3つの要素は、密接に関係し、不可分の相互関係を成している。信仰とは聖なるもの、超越的なものを解釈する基盤となる意味の体系である。こうした信仰は、宗教集団によって生成、維持、強化されてきた。

確かに宗教には、個人的な側面もある。個人の思想、感情、態度に関することがらも、その個人の信仰として扱われてきた。しかし歴史上、その大半は集団的行動として行われてきたのである。

一方、儀礼とは定式化された行為の体系である。こうした儀礼に参加することは、宗教集団のメンバーの義務であり、権利でもある。儀礼によって、個人は集団との強烈な一体感を覚えると同時に、その集団への帰属意識をより強く思い起こすことになる。

宗教集団がなければ、信仰や儀礼の存続は極めて困難になるといえる。逆に、こうした信仰、儀礼が存在しなければ、宗教集団もまた、集団としては存続し得ないのである。

イスラム共同体「ウンマ」

宗教集団が、信者によって構成された「記憶の共同体」であるということは上述した通りである。例えば、イスラム教信者の集団はウンマと呼ばれる。ウンマは、預言者ムハンマドにより語られた物語を共有し、これを維持することによって存在してきたといえる。

ウンマの共有する物語は、イスラム教の教典である「コーラン」や、ムハンマドの言行録である「ハディース」に残されているが、これらの教典があるだけでは、共通の記憶を存続させることはできない。これらの教典の価値を理解し、守ってきたウンマの存在があったからこそ、コーランやハディースもその価値を維持し続けられるのである。

そして様々な儀礼を通じて、このウンマは可視化され、さらに結束を強める。特に、ハッジと呼ばれるメッカへの巡礼では、世界中から多くの信者が集まる。国籍も民族も言葉も文化も異なる人々の中で、共通するものは、イスラム教への信仰だけである。異教徒がメッカに入ることは許されていないため、その空間にいる人間だというだけで、信者は他者と仲間意識を抱くことができる。さらに巡礼中は、みな同じ儀礼を取り行うことによつ

³⁸ 星野英紀、池上良正、氣多雅子、島藺進、鶴岡賀雄（編）『宗教学事典』丸善、2010年

³⁹ 「宗教共同体」「宗教団体」「宗教教団」という表現もあるが、「宗教集団」に統一する。

て、その一体感はより強められるのである。

「ファン」という宗教集団

AKB48 のファンも、AKB48 を支持し、その歴史、物語を共有している宗教集団であるといえる。AKB48 には、教典と呼ばれるような特定の媒体があるわけではない。しかし、AKB48 に関して情報を発信する媒体は、公式、非公式にかかわらず数多く存在している。CD や DVD、テレビ、書籍、ネット上のサイトなど、様々な媒体を通じて、ファンは情報を集め、AKB48 について知ることができる。

CD からは AKB48 の楽曲を聞くことができ、コンサートの DVD を見れば、そこで何が起きたのかを確認することができる。テレビからは AKB48 の大まかな活動が把握できるし、書物に至っては、AKB48 の解説本から、メンバーを紹介する写真集やフォトブック、AKB48 を研究対象とした学術書のようなもの、握手会の攻略本など、幅広い角度からその実態を知ることができる。

中でもファンにとって大きな情報共有ソースとなっているのが、ネット上に存在する様々なサイトである。AKB48 側が発信する公式の情報はもちろんであるが、ファンから発信される非公式の情報量はその量を遥かに超えてしまっている。ネット上であれば、ファン個人も気軽に、簡単に、情報を発信できるからである。AKB48 に関するニュースを随時挙げていくサイト、2ちゃんねるに代表されるようなネット掲示板、個人の書いたブログ、体験記などからは、実に多くの情報を手に入れることができる。AKB48 に関して、今日どこで何があったのか、メンバーが何をしたのか、それぞれのイベントに参加する際はどのように立ち振る舞えば良いのかなど、ネットを通じて得られない情報はもはやないと言って良い。

姉妹グループを含めた広義の AKB48 の活動は、その規模があまりにも大きくなり過ぎたが故に、一人で把握しきることはほぼ不可能になった。そのため、ファンは自分の知っている情報をネット上で発信し、知らない情報もネット上から見つけるのである。このように、ネットを中心とした様々な媒体を利用し、ファンは AKB48 に関するあらゆる記憶を共有しているである。

宗教集団の特徴には、記憶の共有の他に、集団として抱かれる一体感、共同体意識がある。イスラム教のウンマを用いて述べたように、それは儀礼が行われる際に最も顕著に表れると言って良い。第1章2節では、AKB48 の儀礼の例として、ライブ中に行われる定式化された行動を挙げた。似通った服装を身にまとい、MIX と呼ばれる祈りを唱えることで、それまでバラバラだったファン、すなわち AKB48 信者の中には、確かに強烈な一体感が生まれるのである。これは、シアター公演やコンサートに、実際に行ったことのある人間にしか分かり得ない、かなり特異な一体感である。この場にいることによって、ファンは自分が AKB48 のファンであるという自覚を高め、ファンという宗教集団への帰属意識を強く持つことになるのである。

しかしこうした集団としての一体感は、ライブ以外でも見ることができる。その最も良い例が、ネット上に出来上がったファンのコミュニティである。濱野智史も、その著書の中で、このネット上に生まれたファンの共同体意識を挙げているので、以下で抜粋する。

「2012年の第4回選抜総選挙で、開票速報で40位にランクした、チームAの中田ちさについて取り上げよう（おそらく本書読者は名前を聞いたことすらないはずである）。2007年に4期生として加入。今年で6年目と、古株といってよいメンバーである。

これまで彼女は決して人気のあるメンバーとはいえなかった。第1回総選挙の速報でランクインしたことがあるのを最後に、ずっと圏外のままで来たのである。これに対し彼女のファンたちは、64位まで枠が拡大した今年こそ、彼女をランクインさせようと決意した。そうでなければ、彼女は夢を諦め、引退してしまうのではと恐れたからだ。ファンたちは一致団結して、速報前に票を結集した。

その結果は見事に実った。速報発表後、2ちゃんねるの中田ちさと応援スレッドでは、ランク入りを喜ぶファンたちの声が相次いで投稿された。そのなかには、今回の速報結果を見た「古参」と呼ばれる古くからのファンの姿もあった。…（中略）…もうAKBグループからは関心を失っていたという。しかし、今回の中田ちさとランクインの一報を聞いて感動し、微力ながら投票に協力させてほしいというのだ。その古参からの申し出に、『ありがとう！』とファンたちは歓待の声を上げた。

…（中略）…普段は匿名の荒らし・誹謗中傷に満ちた2ちゃんねるで、ここまで温かい空気に満ちたスレッドを見ることはめったにない。それはまるで旧知の仲が久しぶりに集まる、地域共同体の姿を見るかのようなようだった。」⁴⁰

このように、ファン同士が実際に顔を合わせることもなくとも、AKB48は共同体意識を生むことができるのである。

ファンの中のヒエラルキー⁴¹

宗教集団には、それが共同体として存在することの他に、もう1つ別の特徴が認められる。その特徴とは、集団の中に生じるヒエラルキーである。宗教集団においては、ときに信者が分類、階級付けされる場合があるのだ。

宗教におけるヒエラルキーとしては、キリスト教カトリックに見られるピラミッド型のそれが最も想像し易いだろう。カトリックにおいては、ローマ教皇を頂点に、枢機卿、司教、司祭、助祭、一般信徒がおり、階級が上であればあるほど、その数は少なく、様々な特権が与えられていた。この上下関係は、聖なる存在（神）からの距離に応じて規定され

⁴⁰ 濱野智史『前田敦子はキリストを超えた』ちくま書店、2012年、pp.102-103

※筆者により、漢数字を数字に変えた。

⁴¹ 夏堀妃可「音楽業界における宗教との類似点」東京外国語大学卒業論文 2012年

ているといえる。現代では、従来のこうした聖職者至上主義に対して修正が加えられているため、世界史の教科書などから学んだ形からは多少の変化が見られるだろう。しかし、ローマ教皇をトップとした緩やかなヒエラルキーは、依然として存在しているといえる。

こうしたヒエラルキーは、カトリックにおけるヒエラルキーほど明確ではないにしろ、AKB48 においても見ることができる。例えば、AKB48 のファンクラブである「二本柱の会」に加入した者には、以下の 5 つの特典が与えられる⁴²。

- (1) 選抜総選挙やリクエストアワーセットリストベスト 100 などの各種投票権
- (2) AKB48 劇場チケット予約枠
- (3) コンサートや各種イベントの先行抽選枠を利用した各種チケット予約権
- (4) 番組観覧への招待
- (5) オリジナルコンテンツの閲覧

またファンクラブ以外でも、インターネットのプロバイダサービスである「AKB OFFICIAL NET」や、携帯電話限定のアプリケーションである「AKB48 Mobile」などに加入することにより、それぞれに各種投票権やチケット枠、そのサービス限定の特典が付与される。そして CD にも、投票券や握手券などが封入され、総選挙に投票する権利や、メンバーと握手する権利が与えられる。

複数のサービスや大量の CD を購入して、選挙でたくさん投票する。その結果投票したメンバーが上位に入れば、ファンは自分が貢献度の高いファンであると思い、誇りやエリート意識を持てるだろう。推しメンが上位になれば、嫌でもその推しメンは注目され易くなる。つまり、ファンは自分の手によって推しメンを他のファンに、そして世間に知らしめることができるのだ。これは、宗教における布教活動と実によく似ている。自分が献身したという実感は、そのメンバーとの「精神的距離」をより縮めることになる。

また大量の CD を買うことによって何度もメンバーと握手することができれば、ファンはそのメンバーとの「物理的距離」も縮めることができる。長い時間握手ができれば、他のファンに対して優越感を覚えることにもなるだろう。もしかしたら、そのメンバーから「認知」⁴³されるかもしれない。これはファンにとって最高の出来事であり、報われたと最も感じられる経験になるだろう。

以上から、AKB48 ではより多くのサービスや CD を購入し、より多くの料金を支払った者に対して、より多くの特典が与えられる仕組みがあることが分かった。ここでは、使う金額によってファンが差別化されているといえる。現在、AKB48 は「国民的アイドル」と呼ばれるまでにその知名度を上げた。そのため、お金を払ってでも特典を得る者がいる一

⁴² AKB48 公式ホームページ ファンクラブ <http://www.akb48.co.jp/fanclub/> (2012 年 12 月 22 日参照)

⁴³ 第 1 章を参照。

方で、AKB48 が好きだと言っても、テレビやネットで見ただけで、お金は一切かけないという者も数多く存在することは容易に予想がつく。

つまり、貯金の多くを AKB48 のため、とりわけ選抜総選挙のために使うようなトップヲタを頂点とし、複数のサービスや CD を購入するヲタク、ファンクラブに加入しているファン、お金は一切かけずにネットやテレビで AKB48 を楽しむレベルの者、というピラミッドのような構造が、ファン集団の中に生じているのである。

使う金額によってヒエラルキーが生まれるという点では、AKB48 が持つこうしたシステムは、宗教のお布施と非常によく似ているといえる。アイドル評論家である中森明夫も、CD の大量買いについて「お布施だと思えばいいんです。信仰ですから。」⁴⁴と述べている。

そもそも、こうしたファンの中のヒエラルキーには、AKB48 に対するファンの想いの強さ、入れ込み具合の差が、根底にある。AKB48 に対してどれだけ強い想いを持っているかは、当然ファン一人一人で異なる。そしてこの違いが、AKB48 に対して使える金額の差になってくる。ファンは AKB48 のためにどれだけお金を使えるかが、様々なイベントを通して試されていると言っても良い。

以上から、AKB48 のファン集団を、宗教集団としてみなすことが可能であること、及びこのファンという宗教集団においては、ヒエラルキーが存在していることが確認された。

第 4 節：象徴—意味を持った「48」

「象徴」は、信仰、儀礼と並び、宗教にとっては欠かすことのできない要素であるといえる。宗教において、信仰対象となる絶対的存在、力は抽象的なものである。そのため、信者がその存在をよりリアルに想定し、感じようとする際には、それを可視化した「何か」が必要となる。その「何か」が象徴なのだ。AKB48 もまた、宗教が象徴を持つと同様に、「48」という象徴を持つ。「48」は単なる数字ではなく「ある意味」が付与されていると筆者は考える。

この節では、まず「象徴」の定義を明らかにし、一般に使われる象徴の例を挙げる。次に、宗教の現場で見られる象徴の例として、キリスト教における十字架について述べる。そして最後に、AKB48 の「48」に与えられた意味と、象徴としての機能について考察したい。

「象徴」の定義

「象徴」を定義するに当たっては、ドイツの神学者、宗教哲学者であるパウル・ティリッヒの定義を使いたい。ティリッヒは「宗教的象徴」について論じる際、まずはじめに一

⁴⁴ 小林よしのり、中森明夫、宇野常寛、濱野智史『AKB48 白熱論争』幻冬舎新書、2012、pp.154

般的な象徴を定義している。なぜなら「宗教的象徴 (Symbol) は、宗教的象徴としてそれにふさわしいところの特別な諸特徴とともに、総じて象徴一般のもつ諸特徴も合わせもっている」⁴⁵からである。そしてティリッヒによれば、象徴には以下の4つの特徴が認められる⁴⁶。よって、この4つの特徴を以って象徴の定義とする。なお、各語句の説明については、宮城保之の論文⁴⁷を参考にした。

- (1) 「非本来性」：人間の意識は、象徴そのものに向けられるのではなく、それによって「象徴されているもの」に向けられるということ。
- (2) 「観照性」：本質的には目に見えないもの、理念的なもの、あるいは超越的なものが、象徴によって直感できるようになること。
- (3) 「自力性」：象徴はそれ自体に内在している力を有しているということ。つまり象徴には必然性があり、他のものとは交換され得ない。一方、「記号 (標識)」⁴⁸は、それ自体の中には力がなく、必然性を持たないため、自由に交換することができる。この交換可能か否かの特徴が「記号」と「象徴」とを区別する。
- (4) 「是認性」：象徴は、社会からの「承認」によって支えられており、記号のように「つくられる」のではなく、社会の承認によって「生まれる」ものであるということ。

ここで注目したいのは、ティリッヒが「自力性」の解説において、「象徴」と「記号」を区別した点である。ティリッヒは、両者の区別を「交換可能かどうか」という基準におき、交換不可能であれば象徴、交換可能であれば記号とした。この区別は、AKB48の「48」が象徴であることの根拠を述べる際に、大変重要な議論であるため、後ほど改めて確認する。

ではここで、一般的に使われている「鳩は平和の象徴」という表現から、鳩が平和の象徴であることを確認しておこう。

具体的な状況を使って説明するために、広島市の平和式典を思い浮かべてほしい。広島

⁴⁵ パウル・ティリッヒ (著)、野呂芳男 (訳) 『ティリッヒ著作集 4 《新装復刊》絶対者の問い』白水社、1999年、pp.276

⁴⁶ 前掲書 pp.276-278

⁴⁷ 宮城保之「世俗化と象徴：パウル・ティリッヒの象徴論を手がかりに」『METROPOLE』第31号、東京都立大学大学院独文研究会、2010年、pp.31-44

※みやこ鳥 首都大学東京機関リポジトリより

<http://www.repository.lib.tmu.ac.jp/dspace/bitstream/10748/4981/1/20017-031-003.pdf>
(2012年12月4日参照)

⁴⁸ 「記号」は宮城保之の訳語、「標識」は野呂芳男の訳語であるが、筆者は以下「記号」に統一する。

市では毎年、原爆の投下された 8 月 6 日に平和式典が開かれ、黙祷、平和宣言の後に放鳩が行われる⁴⁹。千羽にも及ぶ白い鳩が一斉に羽ばたく光景は、誰もが一度は見たことがあるだろう。この状況を、ティリッヒの象徴の定義と照らし合わせてみる。

- (1) 「非本来性」：人は白い鳩そのものを見ているのではなく、そこから想起される平和を心に描いている。
- (2) 「観照性」：鳩という具体的な事物によって、平和という抽象的なものが直感として思い浮かべられる。
- (3) 「自力性」：それが鳩でなければ、人は平和を連想することはできない。鳩は猫や犬、カラスとも交換することはできない。
- (4) 「是認性」：鳩から平和が連想されるのは、社会からの一般的「承認」があるからであり、決して法律などによってつくられ、定められたものではない。(一方、地図記号は国の定めによって別の記号と換えられたり、新たにつくり出すことができる。)

以上から、確かに鳩が平和の象徴であることが確認できた。誰もが一目で平和を思い起こせるからこそ、広島市の平和式典においても、毎年鳩が使われているのだ。

キリスト教における十字架

宗教の現場で見られる象徴の最も分かり易い例として、キリスト教における「十字架」を挙げたい。キリスト教において十字架は、イエス・キリストが磔にされ処刑されたときの刑具とされており、主要なキリスト教派は宗教的象徴としてこれを掲げている。この十字架もまた、キリスト教の象徴としてティリッヒの挙げた 4 つの特徴を有している。

教会にきたキリスト教徒は、祭壇の十字架そのものに祈っているのではなく、十字架から想起されるキリストや神に向かって祈っている。このことは「非本来性」に当てはまる。

また十字架を見た者の多くは、それがキリストにまつわるものであると認識できる。例えば、人は建物に十字架が付いていればその建物は教会であると分かる。これは十字架が「観照性」を持つからである。

教会の祭壇にある十字架を他の物と換えることは不可能である。祭壇に置かれるのは十字架でなければ意味をなさないことから、その「自力性」も認められる。

十字架からキリスト教が連想されるのは、広く世界に「承認」されているからである。この事実から、十字架の「是認性」も証明される。

⁴⁹ 広島市ホームページ 平成 24 年(2012 年)平和記念式典(広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式)式次第、パンフレット及びあいさつ文
<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/00000000000000/1344232091477/index.html> (2012 年 11 月 26 日参照)

以上から、十字架がキリスト教の象徴であることは確認できた。ここで着目してほしいのは、十字架という象徴が持つ複雑さである。鳩は平和と直接結びつくが、十字架がキリスト教に行き着くまでには、実はいくつかの段階を経ている。ティリッヒは「象徴されているもの自体が、再び、より高次の象徴されているものに対する象徴にもなりうる」⁵⁰と指摘しているが、まさに十字架はこれに当てはまる。

簡単に言えば、十字架はそこにつけられたキリストを象徴している⁵¹。しかしそれだけではなく、十字架は、キリストの受難、死に対する勝利の象徴⁵²としても捉えられる。そこからさらに広がると、十字架はキリストの教え全般、キリスト教全体を象徴するに至るのである。

つまり、十字架は言葉ではとても表しきれない、広く曖昧なキリストに関する概念を「全て」包括し、キリスト教の象徴となっているのである。この「広く曖昧な概念を全て網羅してさえも、象徴は象徴たり得る」という事実は、後のAKB48の議論においても改めて指摘したい。

記号としての「48」

これまでに、鳩が平和を象徴すること、十字架がキリスト教を象徴することを例として挙げてきた。そして「48」という数字を象徴の媒体としているのが、AKB48であると筆者は考える。ここでも上の例と同様、ティリッヒの象徴の定義と照らし合わせて考えていきたい。しかしその前にまず、「AKB48」の名前の由来について確認しておこう。

「AKB48」の前部分「AKB」は、専用シアターのある東京、秋葉原（AKIHABARA）に由来する。しかし実は、グループ結成当初から「AKB」だったわけではない。かなり初期の頃ではあるが、秋葉原という地名をそのまま使い「秋葉原^{フナライニイ}48」と名乗っていた時期がある。結成メンバーの募集告知には、AKB48の名はなく「秋葉原48プロジェクト」⁵³と銘打たれていた。また、グループ結成の2005年12月から2006年3月までの期間に行われていた、チームA1stステージ「PARTYが始まるよ」公演の最後の曲「AKB48」のサビは次のようになっている。

秋葉原 48

私たちに

会いに来て

⁵⁰ パウル・ティリッヒ（著）、野呂芳男（訳）『ティリッヒ著作集 4 と「《新装復刊》絶対者の問い』白水社、1999年、pp.276

⁵¹ 星野英紀・池上良正・氣多雅子・島藺進・鶴岡賀雄（編）『宗教学事典』丸善、2010年、pp.93

⁵² 新カトリック大事典編纂委員会（編）『新カトリック大事典』第3巻、研修社、2002年、pp.130

⁵³ AKB48公式ブログ 2005年8月24日分

<http://ameblo.jp/akihabara48/archive1-200508.html> (2012年11月26日参照)

誰よりも好きになって
お願い
ねえ ねえ
そう秋葉原 48
私たちに
会いに来て
この場所で夢を追いかけるから
応援してね⁵⁴

曲名は「AKB48」となっているが、曲中では自分たちのことを「秋葉原 48」と名乗っていたことが分かる。「秋葉原 48」から「AKB48」への変化は、2005年のプロジェクト始動から現在に至るまで、ファンに情報を発信し続けている公式ブログでも確認できる。今では「AKB48 劇場」と呼ばれる専用シアターの名も、ブログの初期の投稿では「秋葉原 48 劇場」となっており、徐々に「AKB48 劇場」という名で定着していることが読み取れる。いつ正式に「AKB48」となったかは定かではないが、グループの呼称が途中で変わったことは、初期からブログの管理人、かつ専用シアターの支配人を勤めている戸賀崎智信と、広報を担当していた西山恭子との会話でも触れられている⁵⁵。

では本節でも重要となる「48」にはどのような由来があったのか。総合プロデューサーである秋元康は、グループ名を決める際に「商品番号」をイメージしており、なるべく無機質な名前にしたかったため、アルファベットと数字の組み合わせにしたという。これを聞くと、「秋葉原」が最終的にアルファベットのA,K,Bの3字に略されたこと、その後ろに数字が付けられたことにも納得がいくかもしれない。しかし、実は「48」であることに必然性や確固たる根拠があったわけではない。

戸賀崎智信によると、秋元康はプロジェクト発動前から50人程度の人数構成を考えていた。しかし結成当初の所属事務所であるoffice48の社長、芝幸太郎の好きな数字が48(シバ)であったため、50人程度のグループを作るなら48人にしたい、ということで「48」が付いたという⁵⁶。つまり乱暴に言ってしまうと、社長が好きな数字だから、というかなりいい加減な理由から「48」は付けられたのであり、もし好きな数字が「51」であったなら、「AKB51」になっていたであろう。

結局のところ、「48」という数字が付いたことに、特別な意味があったわけではなかった。それは秋元康が述べたように、単なる商品番号、つまり「記号」でしかなかったのである。初期は、1軍24名、2軍24名の最大48名がメンバーであるということの意味していたよ

⁵⁴ AKB48 公式ホームページ ステージソングス
<http://www.akb48.co.jp/about/song/detail.php?team=1&stage=4>
(2012年11月26日参照)

⁵⁵ 『クイックジャパン』第87号、太田出版、2009年、pp.82

⁵⁶ 前掲書、同ページ

うだが、これも「48」という数字があつての構成に他ならなかった。そして今の AKB48 を見れば、もはや 48 名という意味すら失われていることが分かる。なぜなら現在の AKB48 のメンバー数は、研究生を含めると 84 人にも及んでおり、48 を遥かに超えてしまっているからだ。

もともと「48」という数字に意味もこだわりもないのであれば、「AKB84」に変えてしまっても構わないはずである。メンバーの変動が多く、その度に名前を変えるのは現実的ではない、と言ってしまうえばそれまでなのだが、あえて「48」を変えずにいるのは、それが単にメンバーの人数を表す以上の「意味」を有したからだと筆者は考える。ここからは、「48」に付与された意味の正体について考察していく。

「48」がもつ意味

「48」が担った意味を把握するには、姉妹グループとして活動する SKE48、NMB48、HKT48、JKT48、及び公式ライバルである乃木坂 46 の存在が極めて重要になる。これらのグループは「姉妹」や「ライバル」と付くだけあつて、AKB48 とは密接な関係にある。ここでは、上で示した 4 つの姉妹グループと、乃木坂 46 を対比させることによって、「46」ではなく「48」だけに与えられた意味を明らかにしていきたい。

議論に入る前に、混乱を避けるため、改めて語句を整理しておく。ここでの AKB48 は、秋葉原の専用シアターで公演を行うメンバーのみを指す、狭義の AKB48⁵⁷のことである。そして姉妹グループとは SKE48、NMB48、HKT48、JKT48 の 4 グループのことである。またこれらの姉妹グループに、AKB48 を加えた 5 つのグループの総称として「48 グループ」を用いることとする⁵⁸。なお括弧付きで「AKB48」と表記した場合は、その名を聞いて想定される一般的な解釈、つまり CD やコンサートに記載され、メディアで用いられている呼称としての「AKB48」を考えてほしい。

では、本題に入る。姉妹グループと公式ライバルである乃木坂 46 との相違点は大きく 3 つ挙げられる。

1 つ目にして最も重要な違いは、専用シアターの有無である。姉妹グループに共通するのは、AKB48 が秋葉原に専用シアターを持つと同様、活動拠点となる場所に専用シアターを有している点である。SKE48 は名古屋の栄 (SAKAE)、NMB48 は大阪の難波 (NAMBA)、HKT48 は福岡の博多 (HAKATA)、JKT48 はインドネシアのジャカルタ (JAKARTA) に、それぞれ専用シアターを持ち活動している。専用シアターという 1 つの活動拠点を持つことは、AKB48 の最大の特徴ともいえるが、姉妹グループもまた、場所は違えどこのスタンスを受け継いでいるのである。一方、乃木坂 46 は乃木坂という場所の名前が付いているにもかかわらず、専用シアターを持たない。乃木坂 46 単独でのイベントは数多く行われてい

⁵⁷ 狭義・広義については第 1 章を参照。

⁵⁸ なお 48 グループは広義の AKB48 と同義であるが、混乱を避けるため、ここでは 48 グループに統一する。

るが、特定の場所へのこだわり・執着は一切ない。この点は、出発点として専用シアターに大きな意味を持たせている 48 グループとは大きく異なっている。

2 つ目の違いは、「AKB48」との関わり方である。姉妹グループは、「AKB48」のシングルやイベント、コンサートに登場することはほとんど常である。例えば「AKB48」の 26 枚目シングル「真夏の Sounds good！」には 36 名のメンバーが選抜されているが、そのうちの 11 名は AKB48 以外の姉妹グループのメンバーであった。また 2012 年 8 月、AKB48 史上最大規模で行われた東京ドームコンサートには、AKB48 だけでなく、SKE48、NMB48、HKT48、JKT48 の全姉妹グループが登場した。一方、乃木坂 46 のメンバーが「AKB48」の CD シングルに選抜されたことはないし、コンサートにも基本的には参加しない。つまり「AKB48」と言われるときに、姉妹グループが含まれることはあっても、乃木坂 46 が含まれることはないのである。

3 つ目の違いには、グループ間のメンバー移動の有無が挙げられる。48 グループには「移籍」や「兼任」というシステムがあり、これによってメンバーがグループを行き来することがある。

移籍とは、あるグループから別のグループに籍を移すことである。移籍をしたメンバーは、活動拠点、つまりどこの劇場公演に出演するかが変わる。例えば、指原莉乃は 2012 年 6 月に AKB48 のチーム A から HKT48 のチーム H へと移籍した。これにより「AKB48」としてメディアに出ることはあっても、シアター公演にはチーム H の公演のみ出演することができ、チーム A の公演には出られなくなった。

兼任とは、2 つのグループの両方に籍をおき、両方の専用シアター公演に参加することである。例えば松井珠理奈は、SKE48 のチーム S と AKB48 のチーム K を兼任することによって、双方のチームの公演に出られるようになった。

2012 年 12 月時点の兼任メンバーは 6 名⁵⁹であるが、その全てが AKB48 と姉妹グループのどこかとの兼任である。つまり、48 グループ内ではメンバーの行き来が起り得るが、この移動の範疇に乃木坂 46 が含まれることはないのである。

以上から、「48」という数字は「活動拠点となる専用シアターを有している」ことを意味すると捉えられる。拠点が違うにもかかわらず、姉妹グループが「AKB48」として登場したり、グループの枠を超えて活動したりできるのは、この絶対の共通点があるが故である。

だからこそ、姉妹グループの名前は AKB48 と同様、活動拠点となる地名のアルファベット 3 字+「48」という構成になっているのである。一見すれば、それは意味を持たないただの文字と数字の組み合わせに過ぎない。しかしアルファベット 3 字+「48」を見れば、人はそのグループ自体を知らなくても、アルファベットが「ある場所」を示し、その場所に専用シアターを持った AKB48 の仲間（姉妹グループ）であると想像できてしまうのだ。

乃木坂 46 の名も、ある場所と数字の組み合わせであることに変わりはないが、「46」と

⁵⁹ AKB48 公式ページ メンバー

<http://www.akb48.co.jp/about/members/>（2012 年 12 月 28 日参照）

いう数字によって、乃木坂に専用シアターがあるわけではないことが示されてしまう。そしてそれ故に、乃木坂という場所も意味を持たなくなり、NGZ（アルファベット 3 字）に略されることはなかったのである。

「AKB48」の文脈における「48」という数字は、姉妹グループや公式ライバルの出現により「専用シアターを持つ」ことを意味するようになった。「48 グループ」という言葉の存在からも分かるように、AKB48、SKE48、NMB48、HKT48、JKT48 の 5 つのグループは、この「48」という数字の下で 1 つに束ねられるのである。AKB48 の仲間（姉妹グループ）であるを示すためには「46」でも「51」でもなく、「48」でなくてはならない。つまり「48」という数字は、「AKB48」という組織全体を連想させるための変えがたい数字となったのであり、象徴の定義における「自力性」を有しているのである。

象徴としての「48」

ここまでの議論をまとめると、「48」は「AKB48」の象徴としてティリッヒの挙げた 4 つの特徴を有していることが分かる。

- (1) 「非本来性」：アルファベット 3 字と組み合わせられた「48」は、単なる数字として認識されるのではない。これを見た者の意識は、そこから連想される「AKB48」へと向かうことになる。
- (2) 「観照性」：「48」という数字によって連想されるのは、日頃メディアに登場する「AKB48」の主要メンバーかもしれないし、特定の推しメンかもしれない。大人数の少女たちが歌って踊る姿、総選挙や握手会といった独自のイベント、秋葉原のシアターを思い浮かべる人もいるだろう。この数字から想起されるものは決して 1 つとは限らないが、それでもなお、人は漠然と「AKB48」を連想することができる。これは先ほど十字架の例で述べたように、「AKB48」が持つ広く曖昧な概念を、「48」という数字が全て網羅しているからである。
- (3) 「自力性」：「48」は単なる数字、つまり記号としてはじめは出発したが、今では専用シアターの存在を意味することとなった。「AKB48」の仲間（姉妹グループ）であることを示すためには、他のいかなる数字とも換えることはできないのである。
- (4) 「是認性」：「48」から「AKB48」が連想されるのは、「AKB48」自体が有名になり、社会からの承認を受けたからである。逆に言えば「AKB48」自体が知られていない国や地域では、アルファベットと「48」が並んでいても、誰も「AKB48」を思い浮かべることはできない。

以上から、「48」という数字が「AKB48」の象徴として機能していることが確認できた。

第5節：聖地と巡礼—専用シアターの存在

「聖地」とは、神聖な場所、神秘的な場所として、人びとが特別な態度で接する所⁶⁰である。ほとんど全ての宗教が聖地を持つと言っても過言ではない。そして、この聖地に訪れる行為のことを「巡礼」という。巡礼はその宗教において大きな意味を持つ行為であるといえる。AKB48の文脈においては、秋葉原にある専用シアター⁶¹はまさに聖地であるといえ、そこに訪れる者は後を絶たない。

ではAKB48にとって、専用シアターにはどのような価値があるのか。また専用シアターへの訪問を、巡礼として位置づけることは果たして可能なのか。この節ではこれらの問いについて考察するため、まず「聖地」、「巡礼」の定義を行い、イスラム教の聖地巡礼を以ってこの定義を確認しながら議論を進めていく。

「聖地」の定義

「聖地」とは、神聖という概念が空間と結びつくことにより、神聖なものとして意識されている区切られた場所のことである。聖地は他の場所から切り離されることで、聖と俗の分離を生じさせる。そして聖地は、人間に神聖な力と接触する機会を提供し、新たな生の活力を与える⁶²。「宗教文化の違いによって、聖地の実質的特徴や関係する規範の違いが生ずる」⁶³ことは指摘しておくべき点であるが、聖地となる場所は、概してその宗教の教義において、重要とされる人物や出来事にまつわる場所である。

例えば、キリスト教においてはエルサレム、ローマ、サンティアゴ・デ・コンポステーラが3大聖地とされている⁶⁴。エルサレムはキリストの迫害と復活の舞台とされ、ローマにはローマ教皇が居住するバチカン市国があるため、カトリック世界の中心となっている。そしてスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラは、十二使徒の一人である聖ヤコブの墓があることで聖地とされているわけだが、この3ヶ所はどれもキリストや聖人に関わり、キリスト教教義にとって重要な出来事にまつわる地であることが分かる。

「巡礼」の定義

「巡礼」とは、宗教的理念に基づき設定された聖地へと赴き、祈りを捧げる行為である。これは「日常の時空から離脱し、聖なるものとの直接的なふれあいを求める宗教的情熱に支えられた旅」⁶⁵とも言い換えることができる。しかしここでは、巡礼の諸特徴をより詳し

⁶⁰ 井上順孝（編）『現代宗教事典』弘文堂、2005年、pp.309

⁶¹ 各姉妹グループの専用シアターも含める。

⁶² 星野英紀、池上良正、氣多雅子、島藺進、鶴岡賀雄（編）『宗教学事典』丸善、2010年、pp.410

⁶³ 前掲書、同ページ

⁶⁴ 前掲書、pp.472

⁶⁵ 前掲書、同ページ

く検討するため、文化人類学者として有名なファン・ヘネップ（以下、ヘネップ）とヴィクター・ターナー（以下、ターナー）の議論を用いたい。

ヘネップは、人が生まれてから死ぬまでの折々に経験する儀礼の数々を「通過儀礼」として捉え、どの通過儀礼にも典型的な1つの連続系、つまり「分離期」「過渡期」「統合期」の3段階がほぼ普遍的に観察されると指摘した⁶⁶。そして、巡礼という行為にも同様の体系が見られるため、巡礼も通過儀礼の一種として考えられると述べた⁶⁷。

ターナーはヘネップの通過儀礼論を受け継ぐ中で、特に過渡期に注目し、その特徴を「リミナリティ（境界性）」と「コムニタス」という2つの概念で説明した⁶⁸。

ヘネップとターナーによる通過儀礼、及び過渡期の特徴をまとめると以下のようになる。この節では、ヘネップの述べた通り、巡礼を通過儀礼として捉えることとし、以下の諸特徴を以って、巡礼の定義とする。

- (1) 「分離期」：儀礼の参加者は、社会構造の中で定められていた「ある状態」から離れる。つまり、日常から非日常に向かって移行する。
- (2) 「過渡期」：巡礼の参加者は、聖地で聖なるものと接触し、境界的状态を体験する。地位、財産、職業、年齢、性別などにより決定される序列や身分といった世俗的な意識は消え（もしくは均質化され）、参加者の属性は極めて曖昧なものになる。この属性が曖昧な状況を「リミナリティ」といい、その結果として生じる参加者の平等的な関係や強い仲間意識のことを「コムニタス」という。
- (3) 「統合期」：参加者は儀礼が終わると、新たな生の活力、もしくは新たなアイデンティティと共に社会（日常世界）へと戻る。混沌とした過渡期の状態から、再び安定した状態に落ち着く。⁶⁹

ではここからは、上に明記した聖地、巡礼の定義を具体的な現象と照らし合わせて検討していこう。

⁶⁶ ファン・ヘネップ(著)、綾部恒雄、綾部裕子(訳)『通過儀礼』岩波書店、2012年、pp.339-340

⁶⁷ 前掲書、pp.234

⁶⁸ ヴィクター・W・ターナー(著)、富倉光雄(訳)『儀礼の過程』思索社、1976年、pp.125-129
※本書の中では、ヘネップの「分離」「過渡」「統合」という言葉が「分離」「周辺(境界)」「再統合」となっているが、この節では前者に統一する。

⁶⁹ ファン・ヘネップ(著)、綾部恒雄、綾部裕子(訳)『通過儀礼』岩波書店、2012年、
ヴィクター・W・ターナー(著)、富倉光雄(訳)『儀礼の過程』思索社、1976年、
及び野登路雅子「ディズニーランドの巡礼観光一元祖テーマパークのしかけ」山下晋司
(編)『観光人類学』、pp.93-102、新曜社、1996年

イスラム教の聖地巡礼

宗教における聖地巡礼の例として、イスラム教のハッジを挙げたい⁷⁰。ハッジとは、イスラム教最大の聖地であるメッカへの巡礼を指し、ヒジュラ暦（イスラム暦）の12月8日から10日頃に行われる。ハッジは、ムスリム（イスラム教徒）が果たすべき義務である五行の1つとして大変重要な行為である。ハッジは大きく5つの儀礼⁷¹で構成されており、儀礼の順番から、それぞれの儀礼の手順までが細かく決められている。

ではまず、巡礼としてのハッジを取り上げる前に、聖地メッカがムスリムにとってどのような価値があるのかを見ていこう。メッカは、地理的に言えばアラビア半島の西、紅海に面する港町ジッダから内陸へ70キロメートルほど入ったところに位置する都市である。イスラム教において最後にして最大の預言者とされるムハンマドは、この地で生まれ、教義では、天地創造に際して神によって最初に創造された場所がこの地であるとされている。メッカの中にはカアバ（カーバ神殿）があり、ハッジはここを中心に行われる。またムスリムは1日5回の日々の礼拝もこのカアバに向かって行う。礼拝はハッジと同じく五行の1つとされる重要な行為である。メッカは地上で最も神聖な場所とされているため、非ムスリムのここへの入場は禁じられている。これによって、メッカは精神的にだけでなく、物理的にもはっきりと他の場所と区別されているのである。

以上から、メッカはイスラム教の聖地として大きな意味を持っていることが確認できた。では、今度はハッジという行為を、巡礼の定義に照らし合わせて見ていきたい⁷²。

多くの場合、ハッジに参加する者は出発前から様々な支度をする。巡礼用ビザの発行、ハッジに関する情報集めや勉強、親戚への挨拶回りなど、準備の段階から日常生活とは異なる行為が既に始まっているといえる。

そしていざハッジに出発すると、巡礼者はある決まった5ヶ所（ミーカート）からメッカに入ることになる⁷³。巡礼者はそこで縫い目のない白い巡礼衣（イフラーム）に着替え⁷⁴、この巡礼衣を身に付けている間は禁忌（タブー）の状態に入る。具体的な禁止事項は、香水・香油を付けること、爪を切ること、頭髪や髭を抜いたり剃ったり刈ったりすることの他、性交、殺傷行為、争い事など多岐に渡っている。

このように、住み慣れた場所を離れ、普段とは異なる特別な服装に身を包み、日常生活における特定の行為を避けることによって、巡礼者は日常の世界から離れることになるのである。これがハッジにおける「分離期」である。

ハッジの最中は、みな唯一神アッラーとひたすらに向き合うのだという。聖地という特別な場所で、巡礼者は普段以上にその存在を強く、近く、確かに感じるができるよう

⁷⁰ 坂本勉『イスラーム巡礼』岩波新著、2000年

⁷¹ 巡回の儀礼、早駆けの儀礼、立礼の儀礼、ミナーにおける石投げ、犠牲祭の5つ。

⁷² ブログ「Islamic Homeschooling」内「ハッジ体験記」

<http://ummi.seesaa.net/category/12267504-1.html>（2013年1月5日）

⁷³ 陸路の場合。

⁷⁴ 女性は巡礼衣がない。

になる。そして、みなが同じ巡礼衣を纏うことによって、身分や階級、貧富の差が外見からは判断が付きなくなり、巡礼者の属性は不確かになる（リミナリティ）。こうして巡礼者は世俗的な価値観から解放され、互いの関係が平等であるという感覚を覚える。それと同時に、国や文化が違っていても「みな同じ信仰、同じ目的のために集まった同志である」という共同体意識が生まれる（コミュニタス）。

また 200 万人にも及ぶ巡礼者が、定められた作法に則って同じ儀礼を行うことによって、この共同体（ウンマ）は可視化され、その結束をより強化することになる。この現象はまさに「過渡期」の特徴であるといえる。

ハッジを終えた者は、それまで着ていた巡礼衣を脱ぎ、髪を切り、髭を剃るなどして、一連の禁忌の状態から解放される。こうして巡礼を終えた者は、聖なる状態から俗なる状態へと移行し、日常の世界へと戻るのである。しかし、巡礼者はただ巡礼前の状態に戻るのではない。彼らは自分がムスリムであるというアイデンティティと、それに伴う使命感を以前よりもさらに強く感じるようになるのである。これがハッジにおける「統合期」である。

以上から、確かにイスラム教の聖地巡礼であるハッジにも、「分離期」「過渡期（リミナリティやコミュニタスを含む）」「統合期」という巡礼の諸特徴が認められた。

「はじまりの地」としての AKB48 劇場

ここからは、AKB48 の専用シアターである「AKB48劇場^{シアター}」に目を向ける。ファンは、信仰対象である AKB48 を間近に見て、接触することのできる場所として、この場所を文字通り「聖地」と呼ぶ。しかし、握手会など、ファンが AKB48 と接触できる機会は他にも十分ある。では、接触以外に、専用シアターを聖地とさせる要因は何であろうか。ここでは、この専用シアターに一体どのような意味付けがなされているのかを考察していく。

AKB48 劇場は、東京の JR 秋葉原駅から徒歩 5 分、ディスカウントショップとして有名なドン・キホーテのビルの 8 階に位置し、グループ結成当初からずっと同じ場所にある。メディアへの露出が増えた今日に至っても、未だにチーム A,K,B の 3 チームと研究生によって、ほぼ毎日、公演が行われている。

総合プロデューサーである秋元康は、AKB48 プロジェクトを手がける際、従来のアイドルの多くがテレビからスタートしていたのに対し、ショー、つまり劇場をその出発点として構想していた⁷⁵。秋元康曰く、劇場の場所として秋葉原を選んだのは、そこが日本で最もエネルギーに満ちた場所であったからだという。確かに、AKB48 が活動を開始する 2005 年より少し前から、秋葉原は従来の電気街というイメージとは別に、「サブカルチャーの聖地」としても認識され始めていた。所謂「オタク文化」が注目され、秋葉原がその勢いの中心地であったことは間違いない事実であろう⁷⁶。

⁷⁵ 『クイックジャパン』第 87 号、太田出版、2009 年、pp.73

⁷⁶ 2004 年に「電車男」が大ヒットし、空前のアキバブームが到来した。

しかし、この専用シアターの造りは決して理想的だとは言えない。最大の理由は、シアターにそびえる 2 本の柱の存在である。この柱は客席前方の右と左に位置し、ステージ全体を 3 つに分けてしまう。このため、最前列を除いては、どこからもステージ全体を見渡すことができないのである。建物の構造上、取り払うことのできなかつたこれらの柱は、どう考えても邪魔である⁷⁷。また客席動員数は 250 名であり、今日これほど人気を得たグループのステージとしては小さ過ぎると言って良い⁷⁸。

シアターは所詮「ハコ」⁷⁹である。今日の AKB48 の人気を考えれば、ステージ全体が見渡せ、より多くのファンを動員できるシアターに場所を移すことはそれほど難しくないだろう。それにもかかわらず、この AKB48 劇場というシアターはその場所にあり続け、AKB48 のメンバーからもファンからも、特別な場所として扱われているのだ。それは、この専用シアターに単なる「ハコ」以上の意味が付与されているからだといえる。

AKB48 劇場に与えられた意味を見つけるには、AKB48 の成長プロセス・過程、つまりストーリーが極めて重要になる。

では AKB48 のストーリーと専用シアターにはどのような関係があるのか。上述した通り、2005 年 12 月に行われた初公演から、専用シアターはその位置を変えていない。今でこそ、毎公演が満席になるのは当たり前だが、初公演では一般客が 7 人しかおらず、活動開始後しばらくは客席が埋まらない時期が続いていた。その後、徐々に人気が出始め、シアター前のロビーに人が集まるようになると、スペースの問題からそれまでロビーにあったカフェやグッズショップは閉店となった。

今では、公演を見にやってくる人だけでなく、ロビーのスクリーン鑑賞⁸⁰をしに来る人、通路に飾られたメンバー個々人の肖像写真を見に来る人、ファンレターやプレゼントを渡しに来る人⁸¹などで、常に混み合っている状態である。決して広いとは言えないスペースにあまりに多くの人を訪れるようになったことで、近年では入場制限⁸²さえ行われるようになった。

つまり AKB48 劇場は、AKB48 を常に発信し続ける「現場」であった。そしてシアターは、グループが人気を得ていく過程を可視化し、専用シアターそれ自体もまた、それに対応して少しずつ変化していったのである。

AKB48 がストーリーを重視し、そのストーリーの舞台が専用シアターであったからこそ、AKB48 劇場には特別な価値が与えられているのである。AKB48 劇場は原点、つまり「はじまりの地」として語られることがとても多い。ここでは、それを示すエピソードを 2 つ紹介しておこう。

⁷⁷ 当時は時間的、経済的に、この場所以外に選択の余地はなかったと戸賀崎は語っている。

⁷⁸ 現在のチケット当選倍率は 100 倍を超えているという。

⁷⁹ 「ライブハウス」の俗称。

⁸⁰ 公演中は、スクリーンを通じてリアルタイムでそれを見ることができる。

⁸¹ メンバーに直接渡すことはできないが、カウンターにて預けることができる。

⁸² 当日分のチケットを持っている人しか入場できなくなる。

1 つ目は、毎年 12 月 8 日に行われる特別記念公演の存在である。12 月 8 日とは、2005 年に初公演が行われた日であり、まさに AKB48 のはじまりの日である。このような大切な節目の日、AKB48 は必ず専用シアターで特別公演⁸³を行う。主要メンバーが一同に集まり、その日を祝うのだ。そしてこのとき、専用シアターは決まって「原点」と形容される。大切な日に専用シアターに戻ってくることによって、ファンは「どんなに大きなホールでコンサートをするようになって、ここの公演こそが、AKB48 の真髄なのだ」と実感する。AKB48 のメンバーも「どんなに人気を得ても、初心を忘れてはならない」と自覚するのだろう。

2 つ目は、前田敦子の卒業公演が AKB48 劇場で実施されたことである。前田敦子とは、2005 年のグループ結成当初から 1 期生として活動していた AKB48 の主要メンバーの一人であった。2012 年 5 月までに発売された AKB48 の CD では 28 枚中 24 枚でセンターを勤め、3 回中 2 回の選抜総選挙でも 1 位を獲得したことから、AKB48 の「絶対的エース」「不動のセンター」と称されていた存在である。

この AKB48 の「顔」とも言われてきた前田敦子の卒業する舞台となったのが、専用シアターだったのだ。前田敦子の卒業公演は 2012 年 8 月 27 日に実施されたのだが、AKB48 はその直前である 8 月 24 日から 26 日にかけて、念願だった東京ドームでのコンサートを行っていた。3 日間で約 15 万人を動員する大規模なコンサート、かつ AKB48 の長年の夢の舞台であることから、このコンサートを以って卒業するだろうと多くの者は予想していた。そしてその最後の姿を誰もが生で見たいと思った⁸⁴だろうし、前田敦子自身もそれを分かっていたはずである。

それにもかかわらず、前田敦子は東京ドームという大きな舞台の翌日に、250 人しか入れない小さな専用シアターから巣立っていったのである。卒業を意識した特別な雰囲気になったのは公演の後半からで、それまではチーム A の 6th ステージ「目撃者」公演が通常通りに行われた。大きなコンサートの翌日に、いつも通りシアター公演を行うことが、AKB48 の目指すところである、という認識が確かに存在していた⁸⁵。

そして後日発売された「前田敦子 卒業公演」DVD の説明には、「最後のステージは“はじまりの場所”で。AKB48 劇場に新たな伝説が生まれた夜」⁸⁶と書かれている。専用シアターの重要性を、これほどまでに感じさせた公演は未だかつてなかったと言っても過言ではないだろう。

以上から、AKB48 劇場には単なる公演場所、メンバーとファンが接触できる場所、という意味を超えた、原点、つまり「はじまりの地」としての意味が与えられていることが分かった。この専用シアターに向けられる特別な意識や態度は、イスラム教におけるメッカ

⁸³ 普段のチーム制ではなく、人気メンバーを中心にチームシャッフルで行われる。

⁸⁴ 前田敦子の卒業公演のチケット倍率は 916 倍。劇場公演史上、最も高い倍率であった。

⁸⁵ 仲谷明香『非選抜アイドル』小学館、2012 年、pp.74-75

⁸⁶ AKB48 公式ホームページ「前田敦子 卒業公演」DVD

http://akb48-dvdcatalog.com/maeda_sotsugyodvd/ (2012 年 1 月 6 日参照)

とほとんど変わらないと言って良い。なぜなら、これらの地は全て「はじまりの地」として訪れるべき場所、もしくは戻るべき場所であると多くの人から認識されているからだ。AKB48 劇場は、AKB48 にとって間違いなく聖地として機能しているのである。

AKB48 劇場への巡礼⁸⁷

AKB48 劇場が聖地であるならば、そこへ向かう行為は巡礼であるといえる。ではこの専用シアターへの訪問を、先ほどの巡礼の定義と照らし合わせてみよう。なお、ここではその訪問目的が公演の観覧である者に限定することとする。

(1) 「分離期」

巡礼者（公演を観覧しに来た者）が、AKB48 劇場に入り公演を見るためには、大きく 3 つのゲートを通らなくてはならない。秋葉原のドン・キホーテに着くと、AKB48 の巨大な看板がすぐに目に付くが、このドン・キホーテの入り口が第 1 のゲートである。店内に入ると、最上階である 8 階の専用シアターまではエスカレーターでの移動となる。これを上っていく間は、ドン・キホーテの店舗の様子と、壁面やエスカレーターの天井に張られた AKB48 の写真が交互に目に入ってくる。AKB48 の世界と、それ以外の世界が混在している状況と言っても良い。

近年、公演前の時間帯にはロビーへの入場規制がかけられることが多く、7 階から 8 階に上るエスカレーターには係員が配置される。この係員に、その日の公演の当選者である旨を伝えることで、やっと聖域へと入ることができる。これが第 2 のゲートである。ここからは、完全なる AKB48 の世界が広がっている。

チケットに当選した者は公演の 30 分前までにチケットを購入する必要があるが、その際チケットの当選者と購入者が同一人物でなくてはならないため、徹底した本人確認が行われる。無事チケット購入が済むと、与えられた整理番号順に並び、その場のビンゴ抽選によってシアターへの入場順が決められる。ここで再度チケットと身分証による本人確認が行われ、巡礼者はやっとシアターに入ることを許されるのである。

そしてこのシアターへの入り口が第 3 のゲートとなる。ここでのシアターとは、ロビーや通路を含めたものではなく、文字通り公演が行われるスペースのことである。このスペースにいる人間だけが、公演を、AKB48 を生で見ることができる。

シアターには手荷物が持ち込めないため、基本的に巡礼者は身 1 つで入場することになる。服装に特に指定はないが、ジーパンに T シャツなどカジュアルな格好で来る者が多い。サイリウムなどの公式グッズの所持は認められており、これを持つ者も少なくない。

また、そもそもチケットに当選するためには、応募専用のページに登録し、公演毎にチケットを申し込む必要があることも忘れてはならない。つまり巡礼者は、いつ、どのチー

⁸⁷ 野登路雅子「ディズニールンドの巡礼観光一元祖テーマパークのしかけ」 山下晋司(編)『観光人類学』、pp.93-102、新曜社、1996年

ムが、どのようなメンバー構成で公演を行うのかを予め調べ、公演への参加意思を表明するのである。ネット上には公式ページの案内だけでなく、非公式のシアター観覧体験記⁸⁸も数多く見られるため、これらから情報収集する者もいる。聖地に赴くために、前以て準備をする点も、ハッジの参加者と共通している。

このような過程を経ることによって、巡礼者は段階的にAKB48の世界へと入ることとなるのだ。シアター入場までに行われる徹底した本人確認は、チケットの悪質な転売行為を避けるだけでなく、巡礼者に自分が選ばれた人間であるという特別な感情を抱かせる効果も持っているといえる。

(2) 「過渡期」

公演中、信者であるファンは、その信仰対象であるAKB48のメンバーを実際に目にすることができる。最前列は、手を伸ばせばメンバーに届きそうなほどの近さであり、最後列であっても一人一人の表情がしっかりと見える距離であるから、巡礼者の喜びは計り知れない。

そしてこの場においては、ファンは絶対的に平等な関係となる（リミナリティ）。お金を払えば何票も投票できる選抜総選挙のシステムとは異なり、大金を払えばより良い席に案内されるわけではない。入場してからは基本的に自由席になるが、ビンゴ抽選という公平性の下、巡礼者は入場する順番が決められるのだ⁸⁹。隣に座る者の収入、職業といった世俗的な価値観はそこでは重要視されない。運よく同じ日の公演に当たり、AKB48を求めてやって来た仲間であるという意識が働くだけである（コミュニタス）。

また公演中は、第2章2節「儀礼」で説明したように、MIXと呼ばれる儀礼が行われる。AKB48が歌って踊るだけでなく、ファンがMIXを打つことによって初めて、公演は完成すると言っても良い。大規模なコンサートと大きく違う点は、メンバーとファンの交流が楽曲中だけでなく、MCにおいても起こり得るということだ。MCの時間が来た際、ファンが発言し、メンバーがそれに応えるという場面が、シアターでは数多くある。これは、シアター公演ならではの客（ファン）の少なさと、メンバーとファンの近さ故に可能となっている。つまり、メンバー、ファンの垣根を越え、シアターにいる全員で1つの公演を作り上げているという独特の一体感がそこには生まれているのである。

(3) 「統合期」

公演が終わると、巡礼者であるファンは、ロビーでその日公演に出たメンバー一人ずつからハイタッチして見送られる。その後、巡礼者は元来た道を辿って、AKB48の世界から日常の世界へと帰っていくのである。このとき巡礼者の心の中には、「またこの場に戻ってきたい」という切なる想いが生まれる。ファンとしてのアイデンティティもより強化され

⁸⁸ こういった体験記のことを「レポ」という。

⁸⁹ ビンゴ抽選には、女性、ファミリー席などの指定席は含まれない。

て、ファンはこの聖地を後にするのである。

以上から、AKB48 劇場という専用シアターが、AKB48 の聖地としての役割を持ち、ファンがそこへ向かう行為には、確かに巡礼の諸特徴が認められることが分かった。

第6節：救い—ファンが得られる心の平安

「救い」とは、広く捉えれば「心に平安をもたらすもの」とであると定義できる。それは、心に抱える悩みや苦しみ、悲しみ、不安や焦りなどから、人を解き放ってくれるものだともいえる。AKB48 もまた、悩めるファンにとって救いの手となる可能性がある」と筆者は考える。

この節では、宗教において理解される「救い」について確認した上で、AKB48 がどのようにしてファンを救い得るのかを考察したい。

宗教における「救い」

「救済宗教」と呼ばれるものには、此岸と彼岸という対立する世界観が存在する。此岸の位置づけが下がるほど、救済宗教的性格は明確になる。逆に此岸の価値づけが高まれば、此岸、つまり現世中心の世界観が顕になってくる⁹⁰。

例えば、儒教は此岸や血縁に最高の神聖性を付与しており、救済宗教の入り込む余地はほとんど無い。一方、キリスト教やイスラム教においては、預言者によって語られた「世界の終末と天国の到来」の物語が構築され、この物語を中核として伝承してきたという点で、救済宗教であるといえる。また仏教も、現世を苦界と受け止め、そこからの解脱を究極の理想とみなすインドの文化を継承している点で、「解脱的救済宗教」である⁹¹。

救済宗教は、このように何かしらの「救い」⁹²を信者に提示している。しかし、宗教の提示する「救い」とは異なるものに、これが見出されることも十分にあり得る。人によっては、「救い」とは宗教を通じて生きがいを得たり、仲間だと思える人たちと出会うことかもしれない。自分のルーツや真理を発見することかもしれない。宗教によって「その人にとっての救い」が得られたのであれば、その宗教はその人にとっての「救済宗教」であると位置づけることは可能である。そこには、必ずしも死後の世界や彼岸が存在しなくても良いのである。

以上を踏まえると、救済宗教や救いといった概念を定義することは極めて困難であるといえる。なぜなら何を以って救いとみなすかは、宗教によっても、また個人によっても違ってくるからである。しかし、最終的に救いによって得られる「心の平安」は、いかなる

⁹⁰ 星野英紀、池上良正、氣多雅子、島菌進、鶴岡賀雄（編）『宗教学事典』丸善、2010年

⁹¹ 前掲書

⁹² 「救済」という言葉もあるが、ここでは「救い」に統一する。

救いにも共通して見られる要素であると筆者は考える。したがって本節では、「何かを信仰することによって、心の平安を与えられるもの」を救いと定義し、こうした救いを持つものを、広い意味での「救済宗教」と考える。

AKB48 における「救い」

AKB48 において、死後の世界や彼岸について語られることはない。当然ながら、AKB48 は厳密な意味での救済宗教ではない。しかし、先ほど定義した救いの概念に基づけば、AKB48 もまたファンに救いを与える「救済宗教」であるといえる。では AKB48 はファンにどのような救いを提示しているのか。すなわち、どのようにして「心の平安」を与えているのか。ここからは4つを例として挙げ、AKB48 の救いについて見ていきたい。

救い1：マイノリティや弱者への理解

音楽には、人の心を動かして楽しくさせたり、悲しくさせたり、攻撃的にさせたり、穏やかにさせるような力があるといえる。楽曲に強く共感し、勇気や希望を与えられたような経験は、誰しもあるのではないだろうか。辛いとき、この曲を聞いて立ち直れた、また歩き出せた、といったことは決して珍しい話ではない。つまり、音楽には少なからず人を救う力があるといえる。

AKB48 には、シングルとして発表された曲以外にも、劇場公演用の楽曲が数多く存在している。1日2日ではとても全曲を知ることができないほど多いため、共感できる曲を見つけられない、という方が珍しいだろう。そしてこうした楽曲の中には、強いメッセージ性を持った曲もあり、ときに社会的弱者に向けられた曲や、社会的マイノリティの気持ちを綴った歌詞も見受けられる。ここではその例として2曲を挙げたい。

1曲目は「軽蔑していた愛情」である。この曲は2007年2月から6月にかけて、チームAの4thステージ「ただいま 恋愛中」公演の13曲目に歌われており、同年4月にはAKB48の3枚目の（メジャー）シングルとしても発売された。この曲は、学校におけるいじめやそれに伴う生徒の自殺がテーマとされているのだが、2番から最後まで歌詞を抜粋すると次のようになっている。

鳥になろうとした少女は
屋上に靴をちゃんと揃えて
マナーを誉めて欲しかったのか
それとも当てつけなのか

いじめが“あった”とか“なかった”とか
今更 アンケートを取っても
聞いて欲しかった心の声は

風の中 届かない

責任転嫁のプロセスで
偉い人を泣かせる
まだ わかってない
愚かすぎる連鎖を・・・
指を差すのは
何もしなかった
この自分

軽蔑していた愛情
裏腹に飢えているの
不安に気づかぬふりしながら
やさしい目 探してた
いつでも・・・
軽蔑していた愛情
知らぬ間に求めている
孤独になんてなりたくない
抱きしめてほしかった
誰かに・・・

いつでも・・・⁹³

この曲は、歌詞だけでなく、その PV⁹⁴も注目に値する。PV では、曲中に「あんたの事好きな人間がこの世にいると思ってんの?」「みんなあんたの事嫌いだから」「お前マジきもい ウザい 一回死んでくれない?」といった携帯メールの画像が挿入され、見た者は一瞬でそれがいじめのメールであると分かる。まるで、自分に向けて送られているような感覚も覚えるかもしれない。そして、AKB48のメンバーが、いじめに遭っている生徒であるかのように、教室や保健室に独りぼっちでいる姿や、誰にも見向きもされず廊下を歩く姿、屋上で泣きながら今にも飛び降りそうな姿が描かれており、アイドルソングとしては異色の作品となっている。

歌詞や PV を見ると、この曲はいじめに遭う人に向けられたものではなく、それを傍観し対応しなかった人間に向け、その行為を非難している内容にも思われる。だが、「不安に気

⁹³ AKB48 公式ホームページ ステージソングス

<http://www.akb48.co.jp/about/song/detail.php?team=1&stage=4> (2012年1月5日参照)

⁹⁴ 「プロモーションビデオ」の略。

づかぬふりしながら やさしい目 探してた」「孤独になんてなりたくない 抱きしめてほしかった 誰かに」といったサビに見られる歌詞は、確かにいじめに遭う者の心情である。

そして PV の冒頭と最後に流れるメッセージによって、この曲が最終的にいじめに遭う人に向けられた作品であることを確信させられる。それぞれのメッセージは、曲の流れていない無音の状態、合わせて約 13 秒の間、黒地に白い文字で以下のように書かれている。

(冒頭部分)

君は鳥じゃない。

大地に足をつけて歩いて欲しい。

つらいことがあっても、その先には未来がある。

時はいつだって、記憶の消しゴムだから。

(終わり部分)

どんなにつらいことも時が過ぎれば忘れられる。

1 人で悩んでいないで誰かに打ち明けて。

それは勇気のいることかもしれないけど、君はそんなに弱くない。⁹⁵

アイドルとは、スポットライトの下で輝いている子たちであり、誰からも愛されている存在である。いじめに遭っている人と、アイドルである AKB48 はむしろ対象的な存在であるといえる。しかし AKB48 のファンにとって、自分とは対照的な存在である AKB48 が、自分の気持ちを歌ってくれ、励ましてくれたとしたら、これ以上の救いはないのではないか。なぜならファンの心には、自分のことを理解してもらえたという安堵、「心の平安」が生じるからである。

いじめを経験しているファンが、この曲にどれだけの影響を受けたのかは定かではない。しかし、こうして苦しめられ虐げられ、居場所を失った弱者に対し、AKB48 が救いの手を差し伸べていることは確かである。

2 曲目は「禁じられた 2 人」である。この曲は 2006 年 7 月から 11 月にかけて、チーム K の 2nd ステージ「青春ガールズ」公演の 5 曲目に歌われていた。同姓愛がテーマとなっており、歌詞の中では女性の同姓愛者カップルの気持ちが綴られている。2 番のサビから、部分的な抜粋になるが、歌詞は以下の通りである。

もしも

女として生まれなかったなら

別れ 来なかった

⁹⁵ YouTube 「軽蔑していた愛情」PV <http://www.youtube.com/watch?v=sQLKao5Ze70>
(2012 年 12 月 4 日参照)

もしも
私が男に生まれていたら
結ばれてた 2人

どこまでも あなた
愛して
いつまでも あなた
愛され
永遠を信じ合ってた
罪は
女同士

どうぞ
どうぞ
叶わないこの恋を
許してね
胸に秘めたまま
どうぞ
残酷な運命に
身をまかせ・・・
禁じられた 2人⁹⁶

同性愛者は社会におけるマイノリティであり、彼らに対する差別や偏見は未だに存在しているといえる。近年テレビを中心としたメディアでは「オカマ」「ゲイ」と呼ばれる男性同性愛者の活躍が目立っており、その地位を確立しつつあるといえるが、女性同性愛者が表舞台に出てカミングアウトすることは少ない。「女として生まれなかったなら」「私が男に生まれていたら」「罪は 女同士」といった歌詞は、まさに女性の同性愛者が抱くやるせないさや苦しみであろう。

アイドルソングに限らなくても、同性愛者のようなマイノリティの人間にスポットを当てた曲はなかなか見つけることができない。そうした中で、AKB48が自分の気持ちを代弁し、理解を示してくれるのであれば、それはファンが「心の平安」を得ることにつながると考えられる。

以上、2曲を例に取りながら、AKB48が社会的弱者やマイノリティの人の救いとなり得ることを述べた。AKB48は、一般大衆だけでなく、こうした人々の気持ちを表現すること

⁹⁶ AKB48 公式ホームページ ステージソングス

<http://www.akb48.co.jp/about/song/detail.php?team=2&stage=8>(2013年1月5日参照)

によって、彼らに光を与えているのである。この点において、AKB48は、障害者やハンセン病患者、売春婦、取税人など、当時罪人とみなされ、差別を受けていた人々に対して救いの手を差し伸べた、イエス・キリストと似ているように思われる⁹⁷。

救い2：人生への希望

近年は、若者が夢や希望を持ちづらくなった時代であると言われる。しかしこうした時代にいながら、AKB48の多くのメンバーは夢を公言している。これについて濱野智史は次のように述べる。「総合プロデューサーの秋元康が、当初『クラスで七番目にいそうな女の子』という趣旨で[メンバーを]集めたというように、AKB[48]には、一目見ただけで誰もが惚れ込んでしまうような美少女というのは数少ない。そんな普通のどこにでもいそうなAKB[48]の少女たちが、堂々と『女優』や『歌手』になりたいなどという夢を抱くことは、分不相応なことである。」⁹⁸だが、それでもAKB48のメンバーは輝いている。夢に向かって努力を続けることによって、そのチャンスを掴んでいる者もいる。

人見知りで、歌にもダンスにも自信が持てず、自分がセンターであることに涙を流していた前田敦子も、AKB48を卒業する頃には、センターとしての重圧やバッシングを全て受け止め、神々しいまでのオーラを放っていた。普通の女の子であった前田敦子が、世間の注目を一心に浴びていたのだ。

クラスで7番目くらいの、歌やダンスにも特に優れない、どこにでもいそうな女の子でも、スターのように輝くことができる。しかも、みな、自分と同世代の子たちである。この事実は、夢や希望の持てない若者の、まさに「希望」となり得る。それは、従来のアイドルが高嶺の花であったのに対して、AKB48が等身大の女の子で、親近感の湧く存在だからである。「どうせ私なんか」と思っていた人が、「こんな私でも、頑張ればできるかもしれない、努力すれば報われるかもしれない」と思えるようになるのである。濱野智史も、『ぼんこつ』⁹⁹でもセンターたりうることに、『私でも』と成長と変化への希望を抱ける¹⁰⁰と語っている。

AKB48というグループ自体も、今でこそ世間からの注目を浴びるようになったが、初期の頃は全く日の目を見ることなく活動していた。「アキバのパンツ見せ集団」と後ろ指を指されながらも、ひたすらに己を磨き、努力を重ねた集団であったからこそ、現在の成功があるのである。

そしてAKB48は、従来のアイドルのほとんどがそうであったように、完成された美しい姿だけを見せるのではない。未完成な状態も堂々と表に出し、そこにあるアイドルとしての苦労や辛い体験を惜しまずに提示する。ライブのメイキング映像や、ドキュメンタリー

⁹⁷ 夏堀妃可「音楽業界における宗教との類似点」東京外国語大学卒業論文 2012年

⁹⁸ 濱野智史『前田敦子はキリストを超えた』ちくま書店、2012年、pp.39

※[]内は論文筆者による補足

⁹⁹ AKB48メンバーの一人、島崎遥香の愛称。ボーっとした性格からこの名が定着した。

¹⁰⁰ 濱野智史『前田敦子はキリストを超えた』ちくま書店、2012年、pp.155

映画を通じて、ファンは輝いているアイドルにも、自分たちと同じような苦しみがあることを悟るのである。このように、AKB48は自らの努力する姿や、成長、成功の軌跡をファンに示すことによって、夢を持たなくなった若者に、自分の人生への希望を与える。この希望は、人生の悲観や絶望からファンを解放し、ファンに「心の平安」をもたらしていると考えられる。

救い3：生きがいや自らの存在意義

自分はなぜここに生きているのか、と自問した経験を持つ人は決して少なくないだろう。この問いに答えを出そうとするとき、つまり自らの存在意義や生きる意味を考えると、多くの人は「誰か」の存在を必要とする。筆者は考える。身近な存在で言えば「恋人のため、家族のために生きている」という人は多いのではないだろうか。

人が自分一人のためにではなく、誰かのために生きることを望むのは、誰かのために生きるということは、自らの存在意義に直接結びつくからである。そして自らの存在意義を感じることができる者には、「心の平安」がもたらされ、自分の存在が無意味なのではないかという不安から解放されるのである。

AKB48においては「推す」という行為が重要である。メンバーを推すことを生きがいに行っているファンも数多く存在する。「推す」とは、単純に言えば推しメンを応援することであり、愛情を注ぐということである。そしてファンはこの愛情を少しでも可視化させようと努めるのである。その方法は、劇場公演やコンサートに行き力を使い「コール」する、握手会に通う、選抜総選挙ではできるだけ多くの票を推しメンに投じる、など様々である。要するに、推すという行為は「推しメンのために、生きるということ」¹⁰¹なのだ。一瞬でも長く、推しメンの成長を見守り、愛情を示せるよう努力をする行為そのものである。そして、この推しメンのために生きること、すなわち推しメンを推すことこそが、ファンにとっての存在意義となるのである。

先ほど述べたファンの推しメンに対する愛情とは、濱野智史が指摘したように恋愛感情に限られるものではない。それは我が子の成長を見守る親心のような感覚でもあるため、擬似的な「家族愛」ともいえる¹⁰²。つまり推しメンへの愛情は、恋人や家族に抱くそれと極めて似ているといえる。しかしもちろん、完全に同じ感情であるはずもない。なぜなら推しメンは恋人や家族と異なり、日常世界にいる存在ではないからである。

しかし評論家である宇野常寛は、自分の利害関係（実生活における人間関係）とは離れたところで誰かを推すことが、心の支えになるのではないかと、気持ちよく感じられるのではないかと述べる¹⁰³。すなわち、推す対象は恋人でも家族でもなく、AKB48のメンバーで

¹⁰¹ 濱野智史『前田敦子はキリストを超えた』ちくま書店、2012年、pp.169

¹⁰² 前掲書、pp.144

¹⁰³ 小林よしのり、中森明夫、宇野常寛、濱野智史『AKB48 白熱論争』幻冬舎新書、2012年、pp.127

あるからこそ、ファンは自分の存在意義をより強く感じ、推すという行為そのものを生きがいとすることができるのである。推すという行為によって生きがいや存在意義を見つけたファンは、「心の平安」を得ることができるであろう。

救い4：アイデンティティや帰属意識

人は、前項で述べたように「なぜ自分が存在しているのか」という自らの存在意義について問うことがある。そしてときに、「自分とは何者で、どこに属しているのか」という問いにもぶち当たる。確かなアイデンティティや帰属する場所が定まらないとき、その者は自分の存在意義が見当たらないときと同様、不安に駆られることになる。逆に言えば、何を以って自分を自分と認めるのか、自分がどこの人間なのかを自覚することができれば、その者は「心の平安」を手に入れ、救われることになる。

第2章3節ではAKB48におけるファンという宗教集団について、5節では専用シアターへの聖地巡礼について考察を行った。これらの説でも繰り返し述べた通り、AKB48のファンであれば、様々なことをきっかけとして、ファンとしてのアイデンティティや帰属意識を持つことができる。

例えば、選抜総選挙で推しメンに多くの票を投じたとき、メンバーとたくさん握手をしたとき、握手を重ねることでメンバーから「認知」されたとき、専用シアターでの公演を見に行ったときなどに、ファンは「自分がAKB48のファンである」という強い確信を得る。とりわけメンバーからの認知は、ファンとしてのアイデンティティをかなり強烈に裏付ける要素となる。

なぜなら認知とは、自分がファンであることをメンバーにも知られるということであり、多くの責任が伴うからである。濱野智史も次のように語る。「いま驚いている。あのぼるるに『認知』されているということが、これほどまでに自分の内面を律しうるということに。ぼるるに知られているのだから、正しく生きなければならぬ。そうした思いが強く溢れてくるのだ。」¹⁰⁴

このように、ファンとしての確固たるアイデンティティを持つと、それは日常においても自らを律する力となり得る。

ファンはアイデンティティの他に、帰属意識も持つことができる。ファンがライブにおいて共にヲタ芸を行うとき、自分と同じ推しメンのうちわ、タオルを持ったファンを見かけたとき、もしくはネット掲示板などでAKB48やメンバーについて議論し語り合うとき、ときに協力して選抜総選挙に備えるときなどには、ファンは自分がAKB48のファン集団の一員であると分かる。ファンは、互いに顔を合わせ、自分がAKB48のファンであると告白し、誰が推しメンである、と口に出して言う必要はほとんどないのである。様々な儀礼やネット上の交流を通じるだけで、ファンの中にはAKB48の物語を共有する仲間意識、共同体意識が生まれるのだ。

¹⁰⁴ 濱野智史『前田敦子はキリストを超えた』ちくま書店、2012年、pp.203

このように、AKB48はファンに、ファンとしてのアイデンティティをしっかりと与えることができる。そしてファンは、自分がたった独りなのではない、AKB48という同じ信仰を共にした分かり合える仲間がいる、自分はそうしたファン集団の一員なのだ、という帰属意識を持つことができるようになる。これを実感できるファンは「心の平安」を感じることができるであろう。

AKB48の与える「心の平安」

何が「心の平安」へとつながり、救いとなるかは、ファンによって様々であるといえる。しかし以上4つの事柄から想像されるように、AKB48がファンに「心の平安」を提供することは決して不可能ではない。

したがってAKB48は、ファンに「心の平安」をもたらし、彼らに救いを与える存在となり得るのだ。

まとめ：AKB48の宗教性

AKB48には、宗教でいうところの「信仰」があった。ファンの熱狂的、ときに異常なまでの態度や行動から、AKB48への信仰心を見ることができた。またライブ中に、ファンによって行われるヲタ芸は、宗教の「儀礼」的な行動そのものであった。

AKB48のファン集団は、「宗教集団」と同様、AKB48の記憶を共有し存在していた。ライブなどで同じ儀礼をすることによって、集団としての一体感や結束は高められるという点も、宗教集団にみられる特徴と同じであった。AKB48の場合は、ファンはネット上で語り合い、結束することも可能であった。一方で、ファンの集団の中にはヒエラルキーも存在する。AKB48に対して、いくらお金を支払ったかによって、ファンはそれぞれの階級に分けられるのである。

AKB48の「48」はAKB48の持つ様々なイメージや概念を全て統括し、これを「象徴」していることが分かった。はじめは意味の無かった数字であったにもかかわらず、今では「48」は「48」であるからこそ、AKB48を指し示すことができるのである。

AKB48にとって、AKB48劇場は「聖地」である。ファンがこの場へ訪れる行為は、宗教における巡礼行為と同じ過程を踏むことから、ファンの精神状態からも、「巡礼」と位置づけることができる。

最後に、ファンがAKB48を信仰することによって得られる「救い」について考えた。救済宗教のような「あの世」の観念がなくても、AKB48はファンに様々な形で救いの手を差し伸べているといえる。

以上から、信仰、儀礼、宗教集団、象徴、聖地巡礼、救いという、宗教にとって重要な6つの要素を、AKB48も持っていることが分かった。

第3章：ファンとの関係から見る AKB48

この章では、AKB48 とファンの距離感、関係性に焦点を当てる。AKB48 は、ファンに限りなく近づきながらも一定の距離感を保つ必要があり、そのために様々な仕掛けを使っていると考えられる。こうした AKB48 とファンとの間に生まれる関係が、宗教においては、どのように位置づけられるのかを考察する。

第1節：AKB48 の「近さ」

AKB48 には従来のアイドルにはない様々な特徴があったが、これは「近さ」という一言に集約できる。この節では、その AKB48 の「近さ」がどこから生まれているのかを考察する。

クラスにいそいな女の子

AKB48 には、第2章7節でも述べたように、正統派美少女が集められているわけではない。むしろ、そこには「クラスにいそい」と思われるような普通の女の子が集まっている。実際、彼女たちの多くが AKB48 に入るまでは「普通の女の子」だった。

彼女たちは、手が届かないほどの美少女ではないからこそ、天才的な才能や技能を持っているわけではないからこそ、そして生身の人間として悩み苦しむ姿があり、不器用さを残しているからこそ、ファンは彼女たちに共感し、親近感を持つことができるのである。この感覚が AKB48 の持つ最強の「近さ」であると筆者は考える。

AKB48 には、メイキング映像や舞台裏の様子、実情を紹介する媒体が多い。特に近年は、AKB48 の1年の活動を追ったドキュメンタリー映画まで登場している。そこには、彼女たちが「普通の女の子なのに」必死にもがきながら努力する姿が映し出される。こうした姿を見せることによって、どれだけ人気を得て有名なアイドルになっても、ファンは「近さ」を感じ続けることができるようになっているのだ。

「近さ」を演出する装置

「会いに行ける」というコンセプトは、AKB48 の「近さ」を象徴している。AKB48 は様々なイベント、装置を使って、ファンがメンバーに対して「近さ」を感じることを可能にしているといえる。

まず挙げられるのは、劇場での公演である。今まで「テレビでしか見ることのできない存在」であったアイドルを、「あそこに行けば会える存在」に変えてしまったのだ。そしてこの劇場自体も決して大きくはない。パフォーマンスをするメンバーと客席との距離は驚くほど近くなっている。公演中の MC も台本ではなく、メンバー自身の手によって作られ

る。この MC から浮かび上がる彼女たちの姿は、高嶺の花としてのアイドルではなく、生身の女の子である。MC も、ファンがメンバーに親近感を感じさせる重要な要素となっている。

握手会は、AKB48 のメンバーとファンとの距離が最も近くなるイベントである。自分が握手をしている間は、そのメンバーを独占しているともいえる状況である。それがたとえ数秒だったとしても、1対1でこの関係を築くことができるのは、ファンにとってこの上なく素晴らしい経験であるといえる。

従来アイドルであれば、ファンが手を握って話をすることはあり得ないことであった。しかし、AKB48 では CD を買いさえすれば、これが可能となる。売れる前のアイドルであればともかく、これだけの人気を得た今もなお、AKB48 はこうした握手会を実施し続けている。これは、AKB48 がその「近さ」の重要性を理解している証拠である。

選抜じゃんけん大会も、実は AKB48 の「近さ」を生み出しているといえる。AKB48 のメンバーは、いくら普通の女の子に見えるといっても、ファンにとっては当然ながら神聖な存在である。その中でセンターを勤める者は、もはや最高神といえるほどの神聖さを持つことになる。この極めて神聖なポジションが、じゃんけん大会では、じゃんけんという極めて俗なる手段によって決まってしまうのだ。

よって、じゃんけん大会はセンターの敷居を下げるイベントであるといえる。しかし、これは決して悪い意味ではない。選抜総選挙というイベントによって、センターというポジションはこれ以上ないほどまでに神格化されてしまった。じゃんけん大会は、このセンターというポジションをそのまま「遥か遠くの存在」に留めるのではなく、ファンが愛着を持てるような「近い存在」に戻してくれる効果を持っているのだ。

ファンからすれば、自分が AKB48 ほどの人気を集めることは不可能である。しかし、じゃんけんを勝つことは自分にでもできる。この事実によって、ファンはセンターにできえ「近さ」を感じ続けることができるのだ。第 1 回目の選抜総選挙の翌年に、このじゃんけん大会が始まったのには、こうした意味があるのだと筆者は考えている。

これらのイベントによって、ファンは物理的な「近さ」だけでなく、精神的な「近さ」も、AKB48 に対して感じるできるようになっているのだ。

第 2 節 : AKB48 の「遠さ」

AKB48 には「近さ」があった。しかし AKB48 はアイドルである。どれだけ近づいたとしても、「普通の女の子」のように見えるとしても、本当に「普通の女の子」であってはならない。なぜなら、ただの「普通の女の子」であれば、普通の女の子として扱えば良い存在になってしまうからだ。彼女たちに、わざわざお金を払って会いに行く必要も、握手をしに行く必要もなくなってしまうのである。

AKB48 がアイドルであるためには、ファンにとって聖なる存在でなくてはならない。そのためには一定の距離、つまり「遠さ」が極めて重要になる。AKB48 はこの上ない「近さ」を演出しながらも、同時にきちんと「遠さ」も演出しているのだ。

この節では、前節とは逆に、AKB48 の「遠さ」がどのようにつくられ、それによってファンにどのような感情を持たせているのかを考察する。

「神」用語による AKB48 の神聖化

AKB48 には、「神」と名の付くものが多い。例えば、AKB48 のテレビ番組「AKB48^{ネ申}テレビ」¹⁰⁵、2nd アルバム「神曲たち」、書籍「AKB48 神公演クロニクル～少女たちは劇場で何を叫んだか～」などでは、自らのテレビや楽曲、劇場公演を「神」という言葉で表現している。コンサートでも「神」の言葉は使われたことがあるし、第 1 回目の選抜総選挙の正式名称も「AKB48 13th シングル選抜総選挙『神様に誓ってガチです』」と銘打たれている。

2ちゃんねるをはじめとするネット上には、何か素晴らしい才能や魅力のある人、超越的な事物に対して「神」という言葉は頻繁に使われる。しかし、日本語にも元々「神々しい」「神がかかる」といった表現は存在しており、ニュアンスの軽さはどうあれ、意味はほぼ同じであると言って良い。

「神」という言葉は、本来神聖さを帯びる言葉である。AKB48 が、自ら発信するものにあえてこの「神」という言葉を用いるのは、自分たちの神聖さを暗に示すためであると筆者は考える。仮にそうした意図はなく、単にファンやヲタクによって使われる表現を使っただけだったとしても、結果的に、この言葉によって AKB48 の神聖さは高められたといえる。

アルバム「神曲たち」でいえば、「神」という表現によって、CD に入っている曲が「普通の女の子による普通の曲」なのではなく、「聖なる存在によって歌われた聖なる曲」であるということが示されることになる。また「神様に誓ってガチです」という表現でいえば、「神」という言葉によって、彼女たちの「ガチ（本気）」度合いは最高レベルにまで高められるのである。

AKB48 が聖なる存在であるということは、デュルケムの定義からすると、ファンから完全に分離され禁止された存在であるということである。つまり、AKB48 はこの「神」という言葉によって彼女たちの聖性をしっかりと維持し、ファンに「遠さ」を感じさせているのである。

また、ファンのコミュニティによって生まれた言葉に、「神^{セブン}7」という言葉がある。第 1 回、第 2 回の選抜総選挙が行われた際、上位 7 名が同じメンバーであったことから、絶対

¹⁰⁵ カタカナの「ネ」と「申」を合わせると、フォントのサイズを変えなくても大きく「神」と表せることから「ネ申」と表記されている。

的な人気を得ているメンバーとしてこの7人を指すようになった¹⁰⁶。「神」という言葉を使うことは、まさに総選挙の上位7名を神聖化する行為であるといえる。

この「神7」という言葉が、本当にそれを意図して作られたとは言いきれない。しかし、選挙の結果、ファンがこの絶大な人気を誇る7名をどこか遠くに行ってしまったと感じた可能性は高い。「手の届かない存在」として認識してしまったファンもいたはずである。ファンは、彼女たちを称えるのと同時に、この「遠さ」を表すため、潜在意識の中で「神」という言葉を選んだのかもしれない。

聖女としてのAKB48

AKB48のメンバーは恋愛を禁止されている。これをAKB48の中では「恋愛禁止条例」といい、詳しくは両思い・交際のみが禁止され、片思いは許容されている。これを犯したメンバーは今までグループ脱退などの何かしらの措置を受けている¹⁰⁷。内容の曖昧さ、ペナルティーの不明確さはファンからも問題視されているが、恋愛禁止は鉄の掟として捉えられていると言って良いだろう¹⁰⁸。

こうした恋愛のタブーは、1970年代からのほとんど全てのアイドルに共通している。口に出して言わなくとも、もはやアイドルの中には暗黙の了解として恋愛タブーが存在していたし、ファンも恋愛経験がないことを多かれ少なかれアイドルに期待している。だからこそ、アイドルとして一定の聖性を保つために恋愛タブーを設定することは、最も手っ取り早い手段なのだ。この恋愛に関するタブーを持っているという点では、AKB48は他のアイドルと同じ選択をしているのであり、アイドルの歴史を受け継いでいるといえる。

逆に言えば、恋愛経験、交際経験は一気にそのアイドルの聖性を奪いかねない。それだけ、聖なる存在にとっては処女性が重要なのである。キリスト教カトリックにおける聖母マリアが、イエス＝キリストと同じくらいに神聖な存在としてみなされているのも、彼女がキリストを産んでなお、処女性を保っていたからだと考えられる。

AKB48もまた、恋愛禁止のタブーを設けることによって、処女性を保ち、聖なる存在となっている。彼女たちがもし、普通の女の子であるなら、ファンが付き合うことも可能である。しかしAKB48は、どんなに普通の女の子の距離感にいたとしても、それを許さない。自らを分離され禁止された存在としてファンに突きつけるのだ。ファンはここにAKB48の「遠さ」を見るのである。

¹⁰⁶ この言葉は元々、AKB48劇場の初公演に来た一般客7人を指していたそうだが、今では当時の7名のメンバーではなく、単純に「総選挙の上位7名」を指すと解釈されるようになっている。

¹⁰⁷ 違反によって、メンバー自らが脱退を申し出ることも多い。

¹⁰⁸ 2012年12月、総合プロデューサーの秋元康がこの恋愛禁止条例を否定したが、メンバーはルールとして存在していると発言した。

まとめ：「近さ」と「遠さ」を持つ存在

以上から、AKB48には「近さ」と「遠さ」の両方の側面が混在していることが分かった。AKB48にいる女の子の特徴、様々なイベントが要因となって、ファンは彼女たちに「近さ」を感じることができる。身近にいる存在として捉えることができる。

一方で、選抜総選挙や「神」という言葉の使用、恋愛のタブー化などによって、ファンは彼女たちの持つ「遠さ」を実感する。AKB48のメンバーは神聖化され、決して触れることのできない、遠い存在としても捉えられることになる。AKB48とファンの関係性は、限りなく近いようで、果てしなく遠くもあるのだ。

宗教においても、実はこのような微妙な関係が生まれている。それは信者と、絶対的超越者、つまり「神」との関係である。例えばムスリム（イスラム教徒）は、いつでも神と共にいる、という確かな感覚があるという。朝起きるときも、昼間に道を歩いているときも、何か良いことがあったときも、悲しい出来事があったときも、自分の傍に、その存在を感じることができるのだそうだ。その感覚は、礼拝や巡礼の際に最も強く感じられるともいう。

だが一方で、その存在は目で見ること、耳で聞くことも、手で触って確かめることもできない。自分の知らない世界、まだ見ぬ世界にいる、気が遠くなるほど距離のある存在でもあるのだ。この意味では、求めても求めても確認することのできない、手の届かない存在であると言っても良いだろう。

つまり、宗教における「神」はその存在の聖性を信じる信者にとって、近くもあり、遠くもある。「神」は「近さ」と「遠さ」を合わせ持っているのである。これは、AKB48がAKB48の聖性を信じるファンにとって、AKB48が近くもあり、遠くもあるのと全く同じである。

つまり、AKB48とファンとの関係性、距離感は、宗教における神と信者の間に生まれるそれそのものなのである。この事実からも、AKB48が確かにファンにとっての「神」の役割を果たすことが分かる。「普通の女の子」は、AKB48という巨大な装置によって、「神」へと変貌を遂げるのである。

おわりに

本論では、AKB48 を研究対象とし、その宗教性について見てきた。

第 1 章では、AKB48 に関する基本的な説明を行い、AKB48 の特徴を明らかにした。AKB48 は「会いに行けるアイドル」というコンセプトを持ち、専用劇場でのライブ活動から出発したアイドルであった。全国各地に姉妹グループを持ち、これらのグループは AKB48 のコンセプトを受け継ぎ、専用劇場を有していた。AKB48 には独自の型破りなイベントが数多く存在しており、AKB48 の代名詞としても認識されている。全体として 300 名近いメンバーを抱え、700 曲以上の楽曲を有するという点で、多様性を追求しているグループでもある。

第 2 章では、宗教の持つ諸要素を AKB48 も持ち合わせていることを確認した。宗教における信仰は、ファンによる CD 大量購入などの行動から読み取ることができた。

AKB48 のライブ中に行われるファンのヲタ芸は、宗教における儀礼と同じ特徴を有していた。またファンという信者には、推し変というタブーも設けられていることが分かった。

そして AKB48 のファン集団は、まさに AKB48 への信仰を共有する宗教集団であるといえた。

AKB48 の「48」という数字は、キリスト教における十字架のように、AKB48 の象徴としての役割を担っていた。

AKB48 劇場は AKB48 にとっての聖地であり、ここへ訪れる行為は、宗教における巡礼行為と同様の特徴を有していることも確認できた。

ファンは AKB48 を信仰することによって、自らの存在意義やアイデンティティを得ることができるようになる。宗教の救いによって心に平安がもたらされるように、AKB48 もまた、ファンに心の平安、救いを与えることができることも分かった。

第 3 章では、AKB48 とファンの関係性に着目した。両者の距離は限りなく近くもあり、また限りなく遠くもある。この距離感や関係性は、神と信者の間に生まれるそれと同じであるといえた。

AKB48 はアイドルである。キリスト教やイスラム教などの宗教と、全く同じ土俵に立って存在することは当然ながらできない。しかし、以上から、AKB48 は宗教にとって重要な諸要素を持ち合わせていること、そして AKB48 とファンとの関係性は、神と信者の間の関係性と同じであることの 2 点が確認できた。この 2 点は AKB48 の宗教性を保証し得る事実である。

したがって、宗教の 6 つの重要な諸特徴を持ち、神と信者の関係性を創り上げるという意味においてのみ、「AKB48 は宗教である」と捉えることができる。

参考資料一覧

参考文献一覧

- 青木保之『儀礼の象徴性』岩波書店、1984年
- 井上順孝（編）『現代宗教事典』弘文堂、2005年
- ヴィクター・W・ターナー（著）、富倉光雄（訳）『儀礼の過程』思索社、1976年
- 岡島紳士、岡田康宏『グループアイドル進化論 「アイドル戦国時代」がやってきた！』マイコミ新書、2011年
- 片倉もところ（編）『イスラーム世界事典』明石書店、2002年
- キリスト教大事典編集委員会（編）『キリスト教大事典 改訂新版』教文館、1979年
- 『クイックジャパン』第87号、太田出版、2009年
- 小林よしのり、中森明夫、宇野常寛、濱野智史『AKB48 白熱論争』幻冬舎新書、2012年
- 坂本勉『イスラーム巡礼』岩波新著、2000年
- 下中弘（編）『哲学事典』平凡社、1971年
- 新カトリック大事典編纂委員会（編）『新カトリック大事典』第3巻、研修社、2002年
- 田中秀臣『AKB48の経済学』朝日新聞出版、2010年
- デュルケム（著）、古野清人（訳）『宗教生活の原初形態（上・下）』岩波書店、1975年
- 仲谷明香『非選抜アイドル』小学館、2012年
- 夏堀妃可「音楽業界における宗教との類似点」東京外国語大学卒業論文 2012年
- 新村出（編）『広辞苑 第六版』岩波書店、2008年
- 日本イスラム教会、嶋田襄平、板垣雄三、佐藤次高（監修）『新イスラム事典』平凡社、2002年
- ファン・ヘネップ（著）、綾部恒雄、綾部裕子（訳）『通過儀礼』岩波書店、2012年
- 『48現象 極限アイドルプロジェクト AKB48の真実』ワニブックス、2007年
- パウル・ティリッヒ（著）、野呂芳男（訳）『ティリッヒ著作集 4 《新装復刊》絶対者の問い』白水社、1999年
- 濱野智史『前田敦子はキリストを超えた』ちくま書店、2012年
- 廣松渉、子安宣邦、三島憲一、宮本久雄、佐々木力、野家啓一、末木文美士（編）『岩波哲学・思想事典』岩波書店、1998年
- 星野英紀、池上良正、氣多雅子、島菌進、鶴岡賀雄（編）『宗教学事典』丸善、2010年
- 野登路雅子「ディズニーランドの巡礼観光—元祖テーマパークのしかけ」 山下晋司（編）『観光人類学』、pp.93-102、新曜社、1996年

参考ホームページ一覧

- フリー百科事典 ウィキペディア
<http://ja.wikipedia.org/wiki/> (2013年2月17日参照)
- 「AKB48 ファンが起こした犯罪・事件全録記—痴漢から殺人まで」
<http://matome.naver.jp/odai/2134071990620126601?&page=1> (2012年12月20日参照)
- Sally Falk Moore, Barbara G. Myerhoff 「Secular Ritual」
<http://books.google.co.jp/books?hl=ja&lr=&id=78gecnM8SKgC&oi=fnd&pg=PA3&dq=Myerhoff&ots=Jv9uUuLejV&sig=2bOlyyz3eABHQIYHvubSQdhf3J0>
(2012年12月8日参照)
- 宮城保之「世俗化と象徴：パウル・ティリッヒの象徴論を手がかりに」『METROPOLE』第31号、東京都立大学大学院独文研究会、2010年、pp.31-44 ※みやこ鳥 首都大学東京機関リポジトリより
<http://www.repository.lib.tmu.ac.jp/dspace/bitstream/10748/4981/1/20017-031-003.pdf>
(2012年12月4日参照)
- 広島市ホームページ 平成24年(2012年)平和記念式典(広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式)式次第、パンフレット及びあいさつ文
<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/00000000000000/1344232091477/index.html> (2012年11月26日参照)
- ブログ「刻苦勉励～明日もまた元気で過ごそう～」内「AKB48について色々調べてみたヲタ芸編」
http://kazu-o-uzak.at.webry.info/201005/article_71.html (2012年12月20日参照)
- ブログ「Islamic Homeschooling」内「ハッジ体験記」
<http://ummi.seesaa.net/category/12267504-1.html> (2013年1月5日)
- YouTube 「軽蔑していた愛情」PV <http://www.youtube.com/watch?v=sQLKao5Ze70>
(2012年12月4日参照)
- AKB48 公式ホームページ <http://www.akb48.co.jp/> (2013年1月5日参照)
- AKB48 公式ブログ <http://ameblo.jp/akihabara48/> (2013年1月5日参照)